

データで見る訪日インバウンド市場トレンド

2020年2月発行 年2回刊(年初,年央)

発行 株式会社JTB総合研究所
分析協力 : OAG Aviation Worldwide Limited.
データ提供 : Pacific Asia Travel Association (PATA)



本レポートのご案内

■目次

Executive Summary	P3
Executive Summary(P3)/主要市場別動向(P5)/地域別動向(P6)	
掲載内容	
本レポート全体のサマリーです。市場別動向は中国、韓国、台湾、香港、タイ、欧米豪の6市場、地域別動向は北海道から沖縄までの11地域について「2.主要市場別にみた動向」と「3.地域別市場動向」の内容を要約したものです。	
(注)欧米豪とは英国、フランス、ドイツ、スペイン、イタリア、ロシア、米国、カナダ、豪州の9か国。	
1.訪日旅行者数の動向(総数)	P8
訪日旅行者数の動向(P9)/訪日消費の動向(P10)/周辺国と比較した訪日旅行者数(P11)	
掲載内容	
訪日旅行者数の動向と見通し、消費額(総額)の推移、及び韓国などアジアの周辺国と比較した訪日旅行者数の伸びはどの程度の勢いなのかビジュアルで示しています。	
2.主要市場別にみた動向	P12
市場の規模(P13)/市場の成長率(P14)/訪日競合国への旅行者数と成長率(P17)/国際線座席数の推移からみた旅行者数の見通し(P19)/訪日需要の推移(P22)	
掲載内容	
中国、韓国、台湾、香港、タイ、欧米豪の6市場についてトータルの海外旅行者数(中国、欧米豪についてはアジアの主な国々への旅行者数)と訪日旅行者数、及び消費額の規模と推移を比較しています。各市場からどの国への旅行者数が多いのか、競合国と比較した訪日旅行者数の伸び率はどうか、また国際線座席数の推移を踏まえて推定した向こう3か月の訪日旅行者数の見通しについて解説しています。	
3.地域別市場動向	P24
北海道(P25)/東北(P26)/関東(P27)/甲信越(P28)/北陸(P29)/東海(P30)/近畿(P31)/中国(P32)/四国(P33)/九州(P34)/沖縄(P35)	
掲載内容	
各地域における外国人の延宿泊者数の推移と域内空港における入国者数、及び国際線座席数の推移をもとに推定した今後3か月の見通しを掲載しています。また、中国、台湾、韓国、香港、欧米豪など上位の市場について延宿泊者数の推移と見通しを述べています。	
4.2020年の訪日旅行者数予測	P36
2020年の訪日旅行者数予測(P37)/東京オリンピックの訪日旅行者数に対する影響度(P38)	
掲載内容	
2020年の訪日旅行者数予測を主要市場別(中国、韓国、台湾、香港、欧米豪)に掲載しています。	
データ表	P39
本レポート掲載の図表すべての数値を収録しています。	

レポートの構成

このレポートは訪日旅行需要の現状と見通しについて最新のデータを分析したものです。訪日旅行全体と中国、韓国、台湾、香港、タイ、欧米豪の主要6市場別に現状と当社の独自予測を掲載しています(「1.訪日旅行者数の動向(総数)」「2.主要市場別にみた動向」「4.2020年の訪日旅行者数予測」)。また国内の地域別に訪日旅行需要(宿泊需要)の現状と当社独自の見通しが収録されています(3.地域別市場動向)。

需要見通しについて

このレポートにはOAGの国際線座席数データなどをもとに推定した今後3か月の短期的な見通しと、当社が予測した向こう1年間の予測の2種類の見通し判断・予測値が掲載されています。今後3か月の見通しは国際線座席数データを主な材料として判断しています。座席数の推移は訪日旅行と日本発の海外旅行の両方と連動しますが、当社では日本発の海外旅行需要の予測も行っているため、訪日旅行需要に関しても精度の高い見通しを立てることが可能です。なお国際線座席数の分析にはOAGのスペシャリストの協力を得ています。

グラフの数値・表記について

このレポートは客観的なデータにもとづいて訪日需要のトレンド(需要は上向きか下向きか、変化は加速しているのか減速しているのか)を分かりやすく示すことに重点をおいています。この目的で使用している主な図表は折れ線グラフですが、これらのグラフの数値はいずれも過去12か月間の合計値の伸び率(年率)や指数化した数値(「2018年1月＝100」等と記載)を使用しています。このため、本レポートに掲載したグラフの中には、単月の前年比がマイナスであるにも関わらずグラフの線はプラスの領域に存在していたり、単月の伸び率が前月より上昇しているにも関わらずグラフの線は横ばいとなっているものがあります。分析記述はこうしたグラフの特性を踏まえて執筆されたものとなっています。

主な使用データ

国際航空座席数(OAG <https://www.oag.com/jp/>)/
国際旅行者数統計(PATAmPOWER <http://mpower.pata.org/>)/訪日旅行者数(JNTO)/
訪日外国人消費動向調査(観光庁)/宿泊旅行統計(観光庁)/出入国管理統計(法務省)/
国際収支統計(財務省・日本銀行)

データで見る訪日インバウンド市場トレンド

発行日	2020年2月(年初、年央の年2回刊行)
発行者	株式会社JTB総合研究所 03-6722-0700
分析協力	OAG Aviation Worldwide Limited.
データ提供	Pacific Asia Travel Association(PATA)

本レポートは <https://www.tourism.jp> にてダウンロードいただけます。印刷物は作成しておりません。
転載を希望される場合は弊社までご一報ください。

© JTB Tourism Research and Consulting 2020

Executive Summary

2019年の訪日旅行者数 (本文P9)

年率7~8%台の成長もありえた2019年の旅行者数 ベースとなる訪日需要は底堅い成長率を維持

2019年の訪日旅行者数は3,188万人、伸び率は前年比2.1%増に止まった。伸び率低下の主因は韓国の激減であり、韓国を除く旅行者数は前年の反動要素もあって前年比10.9%と二桁台の伸び率であった。韓国の大幅減がなければ年間の旅行者数伸び率は7~8%台であった可能性がある。今後の推移は2020年1月以降に感染拡大した新型肺炎次第で先が読みにくい状態だが、ベースとなる訪日需要は底堅い成長率を維持していると考えられる。

2019年の訪日消費 (本文P10,P16)

欧米豪など高単価の旅行者増で消費単価が4.2%上昇 一方で市場別にみた単価上昇の寄与度はわずか

観光庁の速報値にもとづく2019年の訪日消費は前年比6.5%増の4.8兆円で旅行者数の伸び率を上回った。欧米豪や中国など相対的に高単価の旅行者の伸び率が高かったために、高単価の旅行者の割合が増え、訪日旅行者全体でみた平均単価が上昇したためである。市場別にみた単価が上昇した国もあるが平均単価に対する寄与度はわずかであった。

主要市場別にみた動向 (まとめP5,本文P12~P23)

韓国除く訪日旅行者数の伸び率は持ち直しの傾向 一方で今後の推移は新型肺炎の影響次第

中国	アジア主要国への旅行者数が加速に反転、訪日もこれに乗って加速している。今後は新型肺炎の感染拡大で大幅減が避けられない情勢。
韓国	訪日は激減、反転の時期が見通せない状況が続く、需要はフィリピンなどに流出している。今後はマイナス幅が若干減少する見通しだが、需要回復のペースは不透明。
台湾	海外旅行者数が減速しつつあり、ベトナムを除く主な競合国が揃って横這いか減速で推移しているが、訪日は前年の反動もあって加速に転じた。今後も底堅く増加を続ける見通し。

香港	海外旅行者数が減速しつつあり主な競合国も揃って減速しているが、訪日は前年の反動もあって加速に転じた。今後は伸び率が減速してくる見通し。
タイ	アジア主要国への旅行者数が減速しており、主な競合国は揃って減速しているが、訪日は加速に転じた。今後、訪日の伸びは減速してくる見通し。
欧米豪	アジア主要国への旅行者数が減速しており主な競合国は減速が横這いで推移しているが訪日は加速を続けている。今後、訪日は加速を続けるものと期待されるがアジアで広がる新型肺炎がブレーキとならないか懸念される。

地域別市場動向 (本文P24~P35)

北海道	現状は韓国の急減に加え、台湾、香港も前年の水準まで需要が回復せず、前年比減が続く。今後は中国が減少に転じるためトータルの需要は前年比減が続く見通し。
東北	現状は台湾や欧米豪の伸びに支えられ、トータルの需要は大幅な伸びが続いている。今後は中国、香港などが減少に転じるため伸びが鈍化する見通し。
関東	現状は韓国、台湾などが減少する一方で中国、欧米豪の増加でトータルの需要は緩やかな増加を維持している。今後は中国が減少に転じるためトータルの需要も減少に転じる見通し。
甲信越	現状は中国、欧米豪、香港などのけん引でトータルの需要は大幅な増加が続いている。
北陸	現状は台湾、欧米豪、中国などの需要が伸び、トータルの需要は大幅な増加となっている。今後は中国、香港などが減少に転じるため、トータルの需要増も鈍化する見通し。
東海	現状は中国の伸びで大幅な増加となっている。今後は中国が減少に転じることでトータルの需要も減少に転じる見通し。
近畿	現状は中国、欧米豪などの伸びで大幅な増加が続いている。今後は欧米豪などの増加が下支えするが、中国が減少に転じ韓国の減少が続くためトータルの需要も伸びが鈍る見通し。
中国	現状は欧米豪や中国の伸びでトータルの需要も大幅な伸びとなっている。今後は中国が減少に転じ韓国の減少も続くためトータルの需要も伸びが鈍る見通し。

Executive Summary (つづき)

- 四国 現状は台湾、中国、香港の伸びでトータルの需要も大幅な伸びとなっている。今後は中国が減少に転じ韓国の減少も続くためトータルの需要も伸びが鈍る見通し。
- 九州 現状は韓国の急減でトータルの需要も大幅に減少している。今後は中国が減少に転じ韓国の減少も続くためトータルの需要も減少が続く見通し。
- 沖縄 現状は韓国の急減でトータルの需要も緩やかに減少。今後は中国が減少に転じ韓国の減少も続くためトータルの需要も減少が続く見通し。

2020年の訪日旅行者数予測 (本文P36~P38)

2020年の訪日旅行者数は3,430万人(前年比7.6%増)と予想
五輪は旅行者数にはマイナスだが影響は比較的小さいと予測
新型コロナウイルスの影響は旅行者数予測には未だ織り込めず

2020年も羽田、成田の空港容量拡大で国際線座席数が増加、これが訪日需要をけん引するだろう。訪日需要がピークを迎える7～9月に東京オリンピックが開催されるため、ある程度のマイナスの影響は避けられないとみられる。しかし日本の場合、欧米豪の訪日ピークが大会開催期間とぶつからないことや、ホテル客室数が増えたために客室レート上昇の抑制が期待されることなどから、過去の大会に比べ小さな影響で済む可能性がある。

以上の予測は2019年12月までの状況に基づくものである。2020年1月半ば以降、感染拡大が進んだ新型コロナウイルスは訪日需要に大きな影響を及ぼしつつあり、年間の旅行者数にもマイナスの影響を及ぼす可能性が高まっている。しかし現時点(2020年2月上旬)では新型コロナウイルスによる年間の訪日需要に対する影響を定量的に検討することが困難である。上記の予測値には新型コロナウイルスの影響は織り込まれていない。

Executive Summary(主要市場別動向)

2020年上期

市場	現状と今後3か月の見通し	規模 2019暦年ベース (2019年1月～2019年12月累計)	成長率 2019暦年ベース (2019年1月～2019年12月累計)	アジア諸国との競合状況	今後3か月の見通し
中国	アジア主要国への旅行者数が加速に反転、訪日もこれに乗って加速している 今後は新型コロナウイルスの感染拡大で大幅減が避けられない情勢	訪日旅行者数 959万人 訪アジア旅行者数 10,118万人 訪日のシェア 9.5%	訪日旅行者数 +14.5% (加速) 訪アジア旅行者数 +7.3% (加速) 訪日のシェア +0.5% ポイント	日本、タイ、ベトナムが加速 韓国の伸び率は依然高水準だが減速しつつある	2019冬スケジュールの座席数が大幅に増えたことで訪日も大きな伸びが期待されていたが、新型コロナウイルスの影響で大幅減が避けられない情勢
韓国	訪日は激減、反転の時期が見通せない状況が続き、需要はフィリピンなどに流出している 今後はマイナス幅が若干減少する見通しだが、需要回復のペースは不透明	訪日旅行者数 558万人 海外旅行者数 2,927万人 訪日のシェア 19.1%	訪日旅行者数 ▲25.9% (減速) 海外旅行者数 +3.0% (減速) 訪日のシェア ▲3.7% ポイント	日本と香港が急減速 対照的に加速しているのはフィリピン ベトナムの伸び率は高水準だが減速しつつある	座席数の減少は2019年Q4で底を打ったとみられ、訪日のマイナス幅も若干縮小する
台湾	海外旅行者数が減速しつつあり、ベトナムを除く主な競合国が揃って横這いか減速で推移しているが、訪日は前年の反動もあって加速に転じた 今後も底堅く増加を続ける見通し	訪日旅行者数 489万人 海外旅行者数 1,697万人 訪日のシェア 28.8%	訪日旅行者数 +2.8% (加速) 海外旅行者数 +2.5% (減速) 訪日のシェア ▲0.7% ポイント	日本は前年の反動要素もあって加速に反転 伸び率トップのベトナムも加速が続くが、その他の競合国は横這いか減速傾向	訪日は底堅く増加を続け訪日シェアも向上していく
香港	海外旅行者数が減速しつつあり主な競合国も揃って減速しているが、訪日は前年の反動もあって加速に転じた 今後は伸び率が減速してくる見通し	訪日旅行者数 229万人 海外旅行者数 1,280万人 訪日のシェア 17.9%	訪日旅行者数 +3.8% (加速) 海外旅行者数 ▲1.8% (減速) 訪日のシェア ▲0.4% ポイント	競合各国が揃って減速 日本は前年の反動要素もあり加速に反転	訪日の伸び率は減速してくるが海外旅行者数全体が減速しているため訪日シェアは持ち直してくる
タイ	アジア主要国への旅行者数が減速しており、主な競合国は揃って減速しているが、訪日は加速に転じた 今後、訪日の伸びは減速してくる見通し	訪日旅行者数 132万人 訪アジア旅行者数 637万人 訪日のシェア 20.7%	訪日旅行者数 +16.5% (加速) 海外旅行者数 +7.1% (減速) 訪日のシェア +0.7% ポイント	日本の伸び率は競合国を大きく引き離しトップでなお加速中 競合国はいずれも減速傾向	訪日の伸びは減速してくるが海外旅行全体が減速しているため訪日シェアは上昇が続く
欧米豪	アジア主要国への旅行者数が減速しており主な競合国は減速が横這いで推移しているが訪日は加速を続けている 今後、訪日は加速を続けるものと期待されるがアジアで広がる新型コロナウイルスがブレーキとならないか懸念される	訪日旅行者数 413万人 訪アジア旅行者数 3,346万人 訪日のシェア 13.4%	訪日旅行者数 +13.9% (加速) 訪アジア旅行者数 +4.1% (減速) 訪日のシェア +0.9% ポイント	日本の伸び率が引き続きトップで加速中 競合国はいずれも減速が横這い	訪日の伸びは加速を続けるものと期待されるがアジアで広がる新型コロナウイルスがブレーキとならないか懸念される

(注)今後3か月の見通しは域内空港の国際線座席数の推移等をもとに予測したもの。訪日旅行者数は2019年計だが各市場の海外旅行者数、訪日のシェアは2019年9月時点の12か月累計値。

(注)欧米豪とは英国、フランス、ドイツ、スペイン、イタリア、ロシア、米国、カナダ、豪州の9か国。

Executive Summary(地域別市場動向)

2020年上期

地域	域内延宿泊者数*の現状と 今後3か月見通し	市場別動向									
		中国		韓国		台湾		香港		欧米豪	
		現状	今後 3か月の 見通し	現状	今後 3か月の 見通し	現状	今後 3か月の 見通し	現状	今後 3か月の 見通し	現状	今後 3か月の 見通し
	*外国人宿泊者数										
北海道	現状は韓国の急減に加え、台湾、香港も前年の水準まで需要が回復せず、前年比減が続く 今後は中国が減少に転じるためトータルの需要は前年比減が続く見通し	大幅な増加	減少に転じる	大幅な減少	減少が続く	減少	横這い	減少	減少が続く	－	－
東北	現状は台湾や欧米豪の伸びに支えられ、トータルの需要は大幅な伸びが続いている 今後は中国、香港などが減少に転じるため伸びが鈍化する見通し	増加	減少に転じる	－	－	大幅な増加	増加が続く	大幅な増加	減少に転じる	大幅な増加	－
関東	現状は韓国、台湾などが減少する一方で中国、欧米豪の増加でトータルの需要は緩やかな増加を維持している 今後は中国が減少に転じるためトータルの需要も減少に転じる見通し	増加	減少に転じる	大幅な減少	減少が続く	大幅な減少	下げ止まる	－	－	大幅な増加	増加が続く
甲信越	現状は中国、欧米豪、香港などのけん引でトータルの需要は大幅な増加が続いている	大幅な増加	－	－	－	踊り場	－	大幅な増加	－	大幅な増加	－
北陸	現状は台湾、欧米豪、中国などの需要が伸び、トータルの需要は大幅な増加となっている 今後は中国、香港などが減少に転じるため、トータルの需要増も鈍化する見通し	大幅な増加	減少に転じる	－	－	大幅な増加	増加が続く	大幅な増加	減少に転じる	大幅な増加	－
東海	現状は中国の伸びで大幅な増加となっている 今後は中国が減少に転じることでトータルの需要も減少に転じる見通し	大幅な増加	減少に転じる	大幅な減少	減少が続く	大幅な増加	増加が続く	－	－	大幅な増加	増加が続く
近畿	現状は中国、欧米豪などの伸びで大幅な増加が続いている 今後は欧米豪などの増加が下支えするが、中国が減少に転じ韓国の減少が続くためトータルの需要も伸びが鈍る見通し	大幅な増加	減少に転じる	大幅な減少	減少が続く	増加	伸び止まり	－	－	大幅な増加	増加が続く

(注)市場別動向は上位4市場について記載している
(注)今後3か月の見通しは域内空港の国際線座席数の推移等をもとに予測したもので、現状、今後の判断基準については次のページを参照。
(注)甲信越については陸路で流入する旅行者数が圧倒的で域内空港の座席数推移をもとに見通しを判断することが困難であるため見通しを記載していない。
同様に北陸の香港市場についても域内空港への直行便乗り入れがないため見通し判断をしていない。

Executive Summary(地域別市場動向) (つづき)

2020年上期

地域	域内延宿泊者数*の現状と 今後3か月見通し	市場別動向									
		中国		韓国		台湾		香港		欧米豪	
		現状	今後 3か月の 見通し	現状	今後 3か月の 見通し	現状	今後 3か月の 見通し	現状	今後 3か月の 見通し	現状	今後 3か月の 見通し
	*外国人宿泊者数										
中国	現状は欧米豪や中国の伸びでトータルの需要も大幅な伸びとなっている 今後は中国が減少に転じ韓国の減少も続くためトータルの需要も伸びが鈍る見通し	大幅な増加	減少に転じる	大幅な減少	減少が続く	減少	下げ止まる	－	－	大幅な増加	－
四国	現状は台湾、中国、香港の伸びでトータルの需要も大幅な伸びとなっている 今後は中国が減少に転じ韓国の減少も続くためトータルの需要も伸びが鈍る見通し	大幅な増加	減少に転じる	大幅な減少	減少が続く	大幅な増加	増加が続く	大幅な増加	増加が続く	－	－
九州	現状は韓国の急減でトータルの需要も大幅に減少している 今後は中国が減少に転じ韓国の減少も続くためトータルの需要も減少が続く見通し	大幅な増加	減少に転じる	大幅な減少	減少が続く	増加	増加が続く	横這い	増加に転じる	－	－
沖縄	現状は韓国の急減でトータルの需要も緩やかに減少 今後は中国が減少に転じ韓国の減少も続くためトータルの需要も減少が続く見通し	大幅な増加	減少に転じる	大幅な減少	減少が続く	増加	伸び止まり	大幅な増加	増加が続く	－	－

(注)市場別動向は上位4市場について記載している
(注)今後3か月の見通しは域内空港の国際線座席数の推移等をもとに予測したもの。

現状、今後の判断基準

現状については過去半年程度の推移をもとに次のような考え方を基準にして判断している。

大幅な増加	年率10%を超える増加が続いている
増加	年率3%～10%の増加が続いている
緩やかな増加	年率3%未満の増加が続いている
伸び止まり	増加から横ばい、もしくは減少に変化している
踊り場	直近の半年は横ばいだがそれ以前は増加もしくは減少していた
横ばい	過去半年以上にわたって増加も減少もしていない
下げ止まり	減少から横ばい、もしくは増加に変化している
緩やかな減少	年率3%未満の減少が続いている
減少	年率3%～10%の減少が続いている
大幅な減少	年率10%を超える減少が続いている

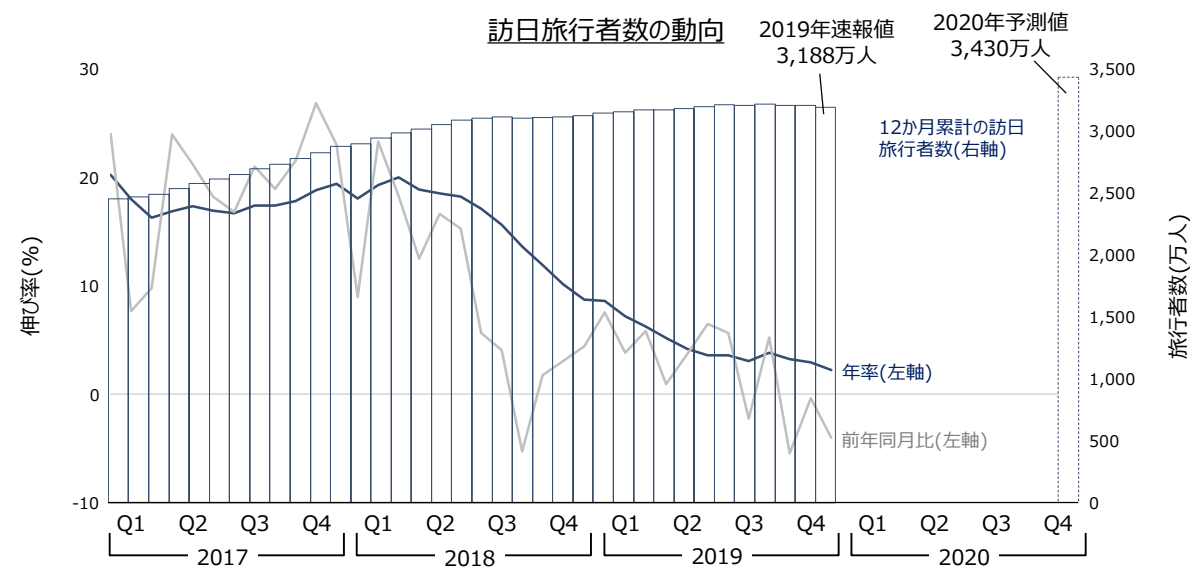
見通し判断の根拠

今後3か月の見通しは各地域の空港発着の国際線座席数の今後の推移を OAG のデータをもとに把握、これと各地域発の海外旅行者数の動向を勘案して判断している。地域によっては域内空港で入国する旅行者数を陸路で流入する旅行者がはるかに上回っているケースもあるが、地域の宿泊需要と域内空港の国際線座席数のプラス・マイナスの向きは概ね一致するものとみている。

1.訪日旅行者数の動向(総数)

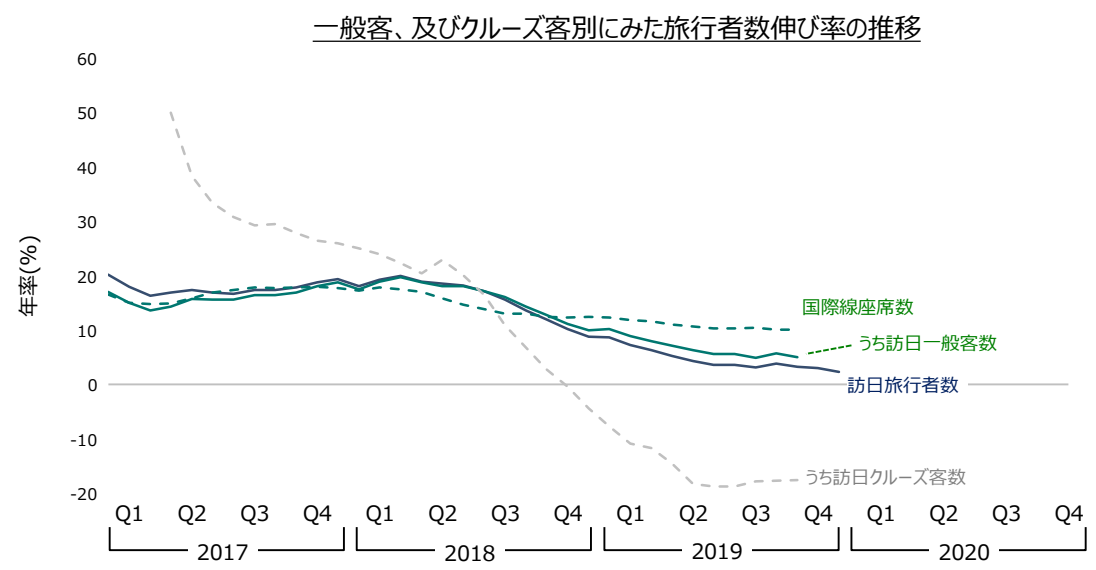
このセクションでは、訪日旅行者数の動向と見通し、消費額(総額)の推移、及び韓国などアジアの周辺国と比較した訪日旅行者数の伸びはどの程度の勢いなのか、ビジュアルで示しています。

訪日旅行者数の動向



訪日需要の成長率は底堅く2020年の旅行者数は3,430万人(7.8%増)と予測も、新型肺炎で下振れの公算が大

- 2018年に相次いだ自然災害の後、2019年に入っても訪日旅行者数の前年同月比は二桁台を回復することができず、7月以降は韓国からの旅行者が大幅に減少したことで更に減速が進む結果となった。2019年の旅行者数は速報値で3,188万人(前年比2.1%増)である。
- 特殊要因による減速が相次いだ結果、現状の訪日市場はどの程度の伸び率まで回復が期待できるのか見えにくい状態である。しかし2019年における韓国を除く訪日旅行者数は前年比10.9%増という水準を保っており、もし韓国の大幅減がなければ年間の旅行者総数の伸び率は7～8%台まで回復した可能性がある。
- このような見方に立ち2020年の訪日旅行者数は3,430万人(7.8%増)と予測したが(2019年12月時点)、2020年1月半ば以降に拡大した新型肺炎による需要下振れの可能性が濃くなっているのが現状である。

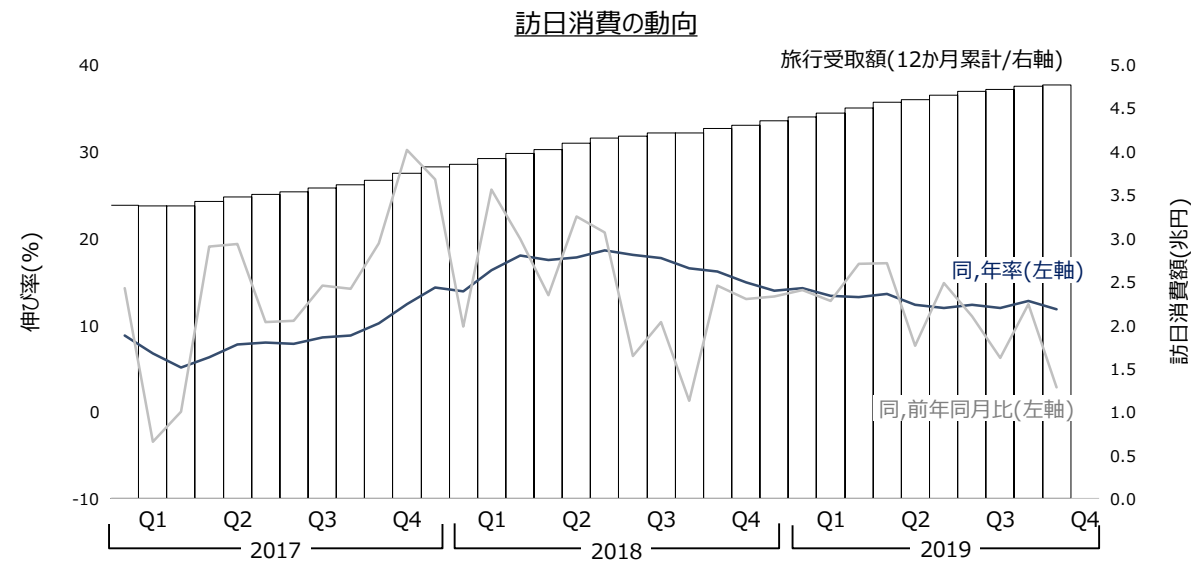


訪日クルーズ客数の減少が続く一方、国際線座席数は10%前後の年率を維持

- 2019年下期も中国市場を中心に訪日クルーズ客数の減少が止まらない。これは訪日旅行者数全体の伸び率に対し▲1%～▲2%程度の影響を及ぼしている。
- 日本発着の国際線座席数は年率10%前後で推移しており訪日一般客の伸び率維持に大きく貢献している。しかしながら訪日一般客の伸び率は座席数の伸びを下回っており、2019年下期は韓国、中国路線など、搭乗率が低下する路線が出てきている。

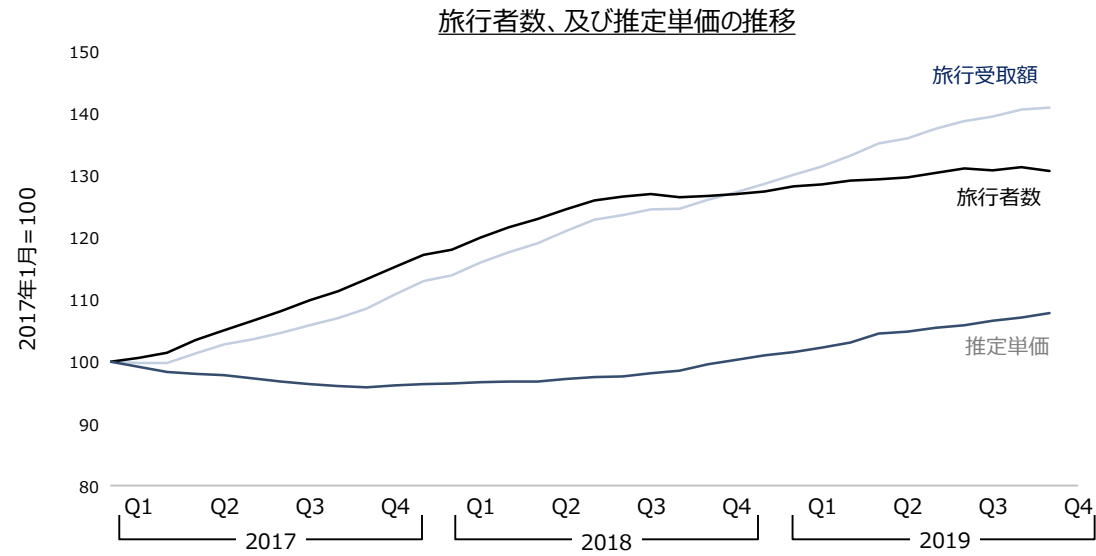
(注)一般客とは出入国管理統計上の定住者を除く正規入国者、クルーズ客は同統計の特例上陸者のうち寄港地上陸、船舶観光上陸、通過上陸の計。
データ出所：訪日旅行者数はJNTO、法務省「出入国管理統計」、国際線座席数はOAG

訪日消費の動向



旅行受取額は訪日旅行者数に比べ堅調な推移

- 国際収支統計の旅行受取額は伸び率が低下しながらも続伸しており、減速感も旅行者数に比べて弱い。
- 一人当たり消費単価が低い韓国の旅行者が減少し中国や欧米豪など高単価の旅行者の割合が増えている。このため訪日旅行者を平均した消費単価が上昇しており、これが旅行受取額の伸びを下支える形となっている。
- 観光庁「訪日外国人消費動向調査」に基づく訪日消費は旅行受取額に比べやや低い伸び率で推移している。旅行受取額の推移と必ずしも一致していないので留意が必要である。



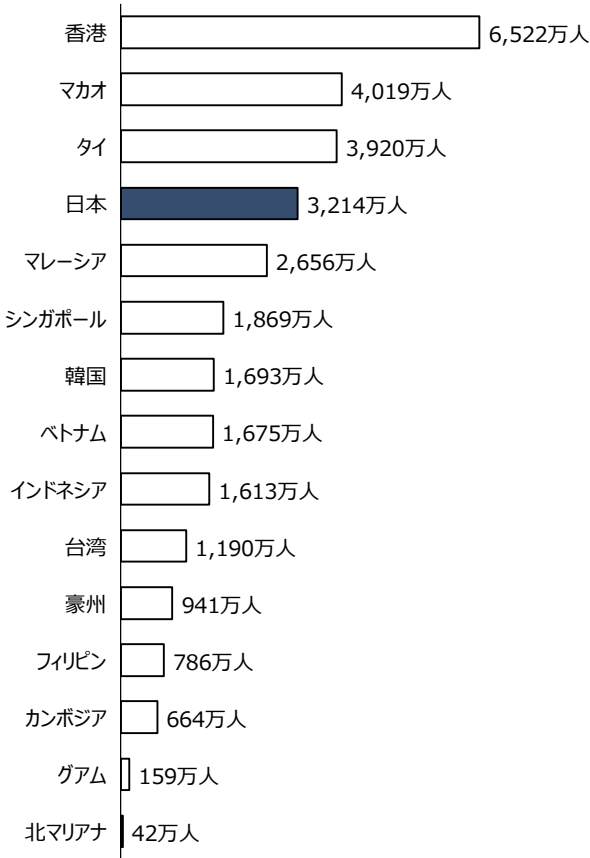
データ出所：旅行受取額は財務省・日本銀行「国際収支統計」、旅行者数はJNTOに基づく。推定単価はJTB総合研究所が算出。

周辺国と比較した訪日旅行者数

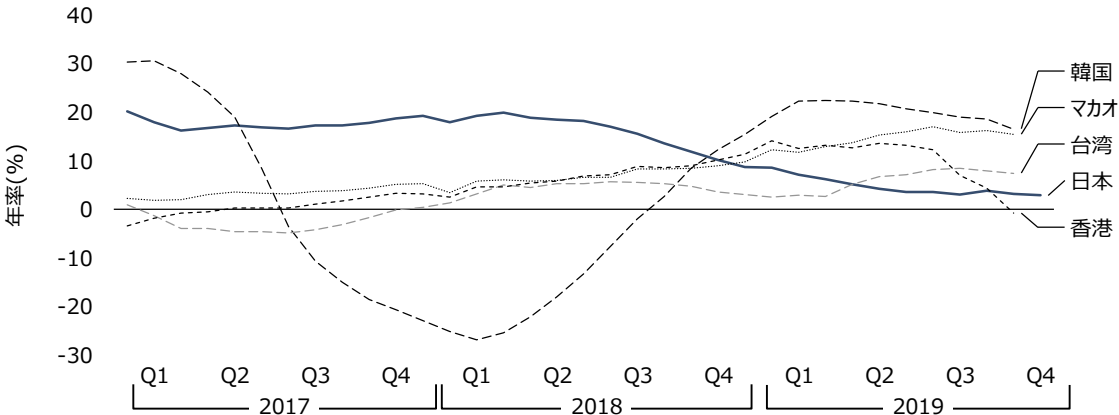
日本の伸び率が東アジア各国の中で最低に

- 2019年下期における東アジア各国の伸び率はいずれも減速傾向にあり、デモの影響を受けた香港の伸び率が大きく低下している。日本の伸び率は香港に次いで低く、トップの韓国に比べ10%以上の差がついている。
- これとは対照的に同時期における東南アジア各国の伸び率は大幅に加速している。中国、韓国、日本、台湾など北東アジアの主要市場発の海外旅行需要が東南アジアにシフトしているものとみられる。

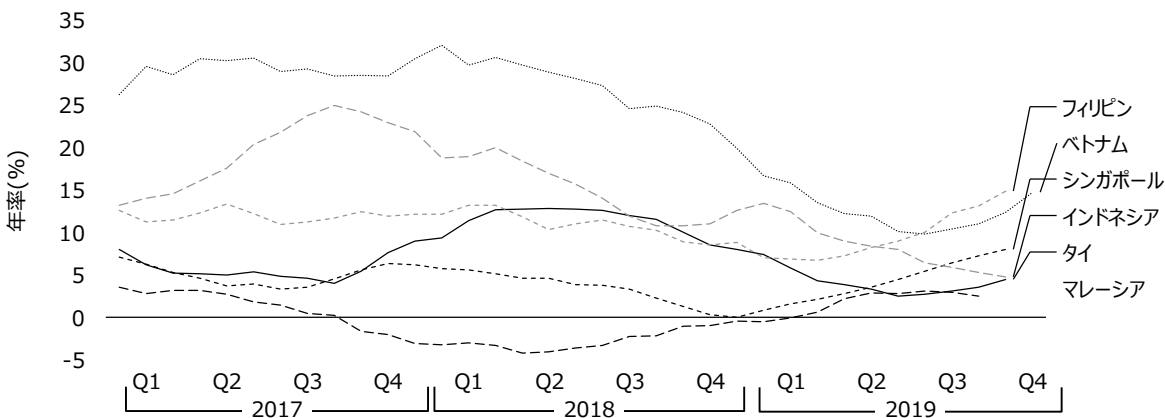
周辺国と比較した訪日旅行者数(2019年)



東アジア各国への旅行者数の伸び率



東南アジア各国への旅行者数の伸び率



(注) 棒グラフのデータは2018年10月～2019年9月(12か月間)の累計値。
データ出所：各国への旅行者数はPATAmPOWER から抽出したもの。

2.主要市場別にみた動向

このセクションでは、中国、韓国、台湾、香港、タイ、欧米豪の6市場についてトータルの海外旅行者数(中国、欧米豪についてはアジアの主な国々への旅行者数)と訪日旅行者数、及び消費額の規模と推移を比較しています。各市場からどの国への旅行者数が多いのか、競合国と比較した訪日旅行者数の伸び率はどうなっているか、また国際線座席数の推移を踏まえて推定した向こう3か月の訪日旅行者数の見通しについて解説しています。

市場の規模

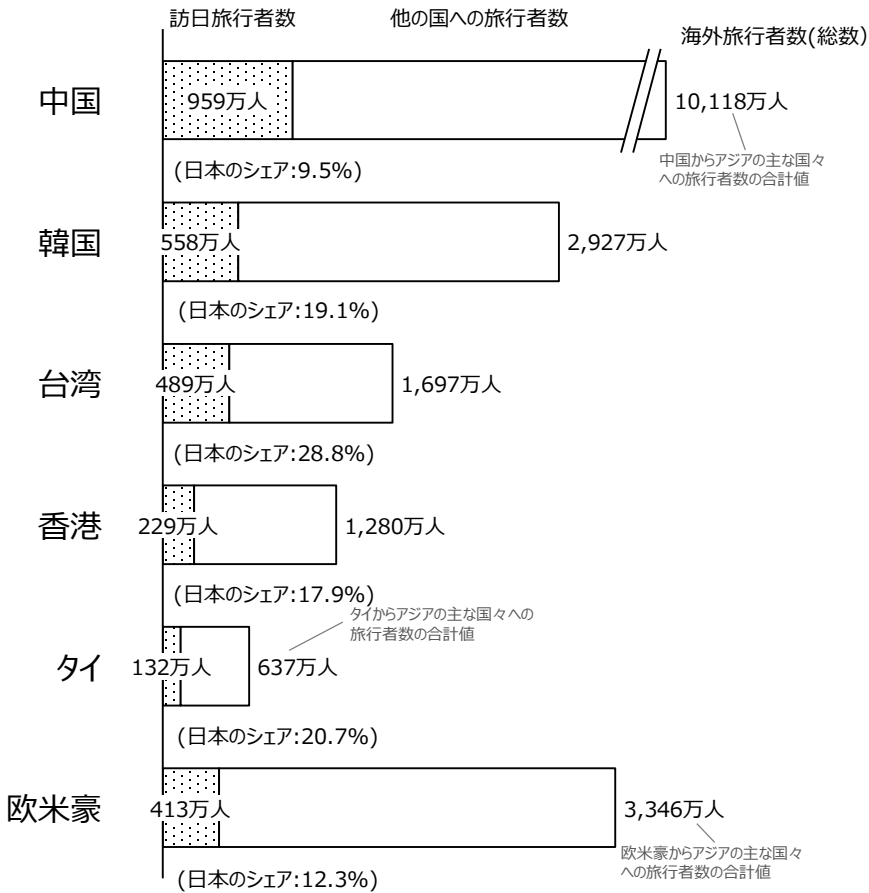
中国からアジアへの旅行者数は他市場のトータルの海外旅行者数を上回る
 欧米豪からアジアへの旅行者数は韓国の海外旅行者総数を上回る規模

- 訪日旅行者数のベースとなる海外旅行者数のボリュームでは中国が圧倒的である。なお記載の中国の数値はアジア太平洋の主な行先国への旅行者数を合計したものである。旅行者数で2番手は韓国、3番手は台湾だが、欧米豪からアジア太平洋の主な行先国への旅行者数を合計すると2位の韓国をしのぐ数となる。

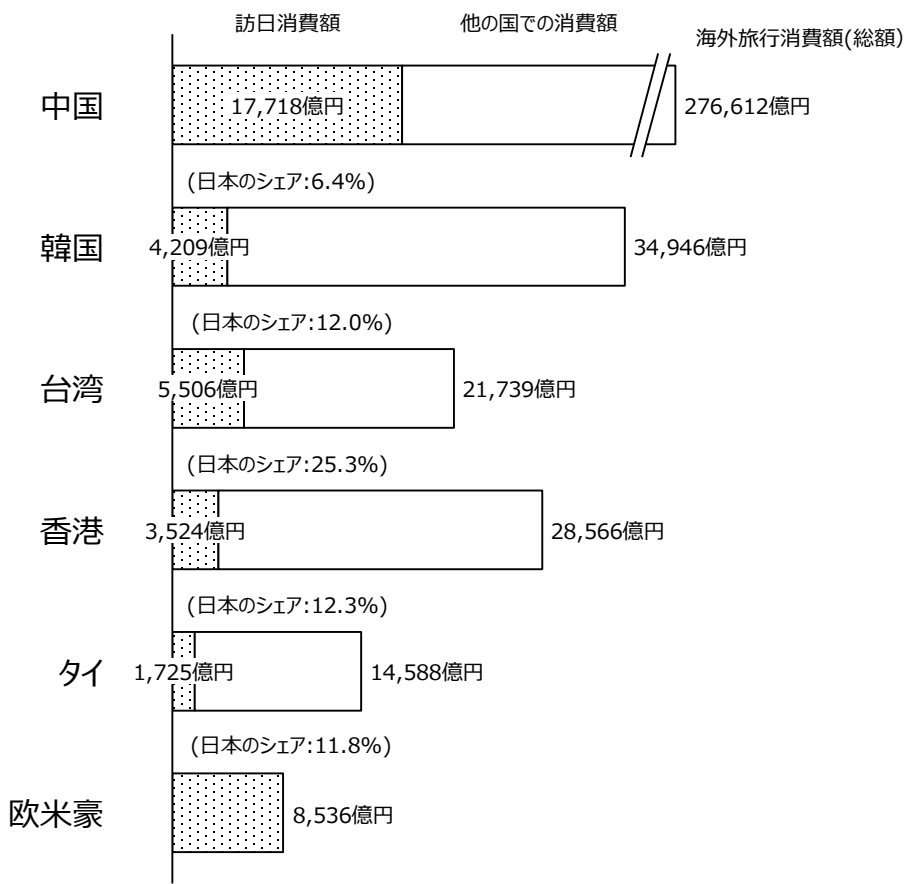
中国の海外旅行消費額は韓国、台湾、香港、タイの合計をも上回る規模
 訪日消費額では欧米豪が中国に次いで第2位

- 消費額では海外旅行消費額(総額)、訪日消費額のどちらでみても中国の規模が突出している。
- 欧米豪をひとつの市場としてみると訪日消費額の規模は、韓国、台湾を上回り、中国に次ぐ2番手となる。

主要市場の海外旅行者数と訪日旅行者数(2019年)
 2019年1月～2019年12月累計



主要市場の海外旅行消費額と訪日消費額(2019年)
 2019年1月～2019年12月累計



(注) 数値はデータの得られる最新月から過去12か月間の累計。欧米豪とは英国、フランス、ドイツ、スペイン、イタリア、ロシア、米国、カナダ、豪州の9か国。
 データ出所：韓国、台湾、香港、タイの海外旅行者数は各国の統計機関の公表数値。中国、タイ、欧米豪はアジア太平洋の主な行先国への旅行者数をPATAmPOWER 収録データをもとに合計したもの。海外旅行者数の集計期間は2018年10月～2019年9月の12か月間。欧米豪からアジアの主な国々へ旅行者数合計値は2019年7月発行時点から集計対象が変更となっている。またタイの掲載数値は海外旅行者数からアジアの主な国々への旅行者数に変更されている。海外旅行消費額は各国中央銀行の国際収支統計に基づく。欧米豪に関しては数値不明のため掲載せず。訪日消費額は観光庁「訪日外国人消費動向調査」に基づく2019年の速報値。

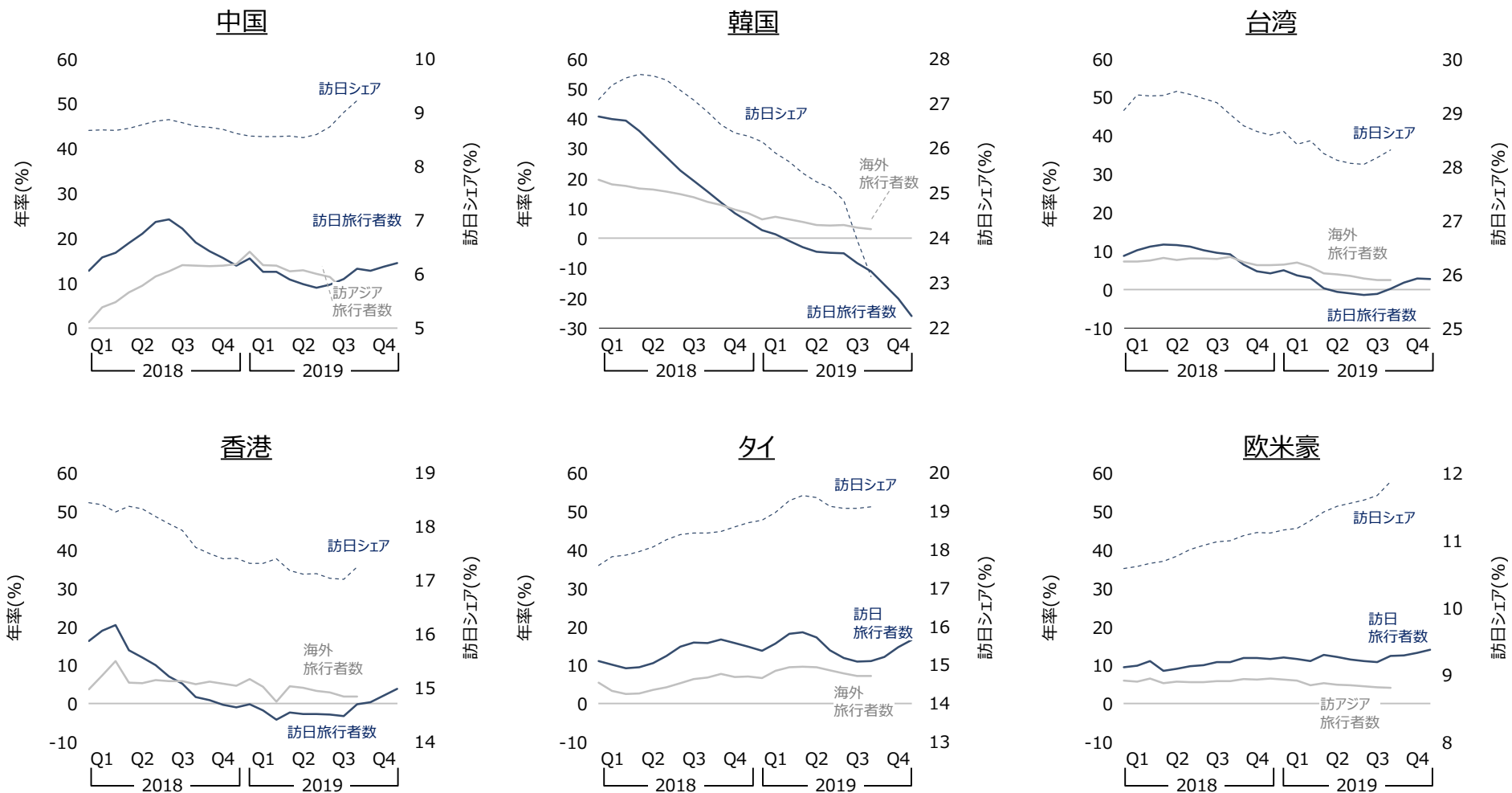
市場の成長率(旅行者数)

海外旅行者数の減速傾向は中国除く各市場で続く

- 訪日旅行者数のベースとなる各国の海外旅行者数(中国と欧米豪ではアジアの主要デスティネーションへの旅行者数の合計値)の伸び率は中国では2019年下期に加速に転じたがその他の市場では引き続き減速傾向にある。

韓国を除き訪日旅行者数の伸び率は加速に転じ持ち直しつつある

- 中国、台湾、香港、タイからの訪日旅行者数の伸び率は2019年下期に入って加速に転じ2018年の自然災害の影響が払しょくされつつある。また10%強の年率を維持してきた欧米豪の伸び率も緩やかに上昇している。
- 訪日旅行者数トータル伸び率は韓国単独のマイナスで急減速しているが、韓国以外の旅行者数は堅調である。



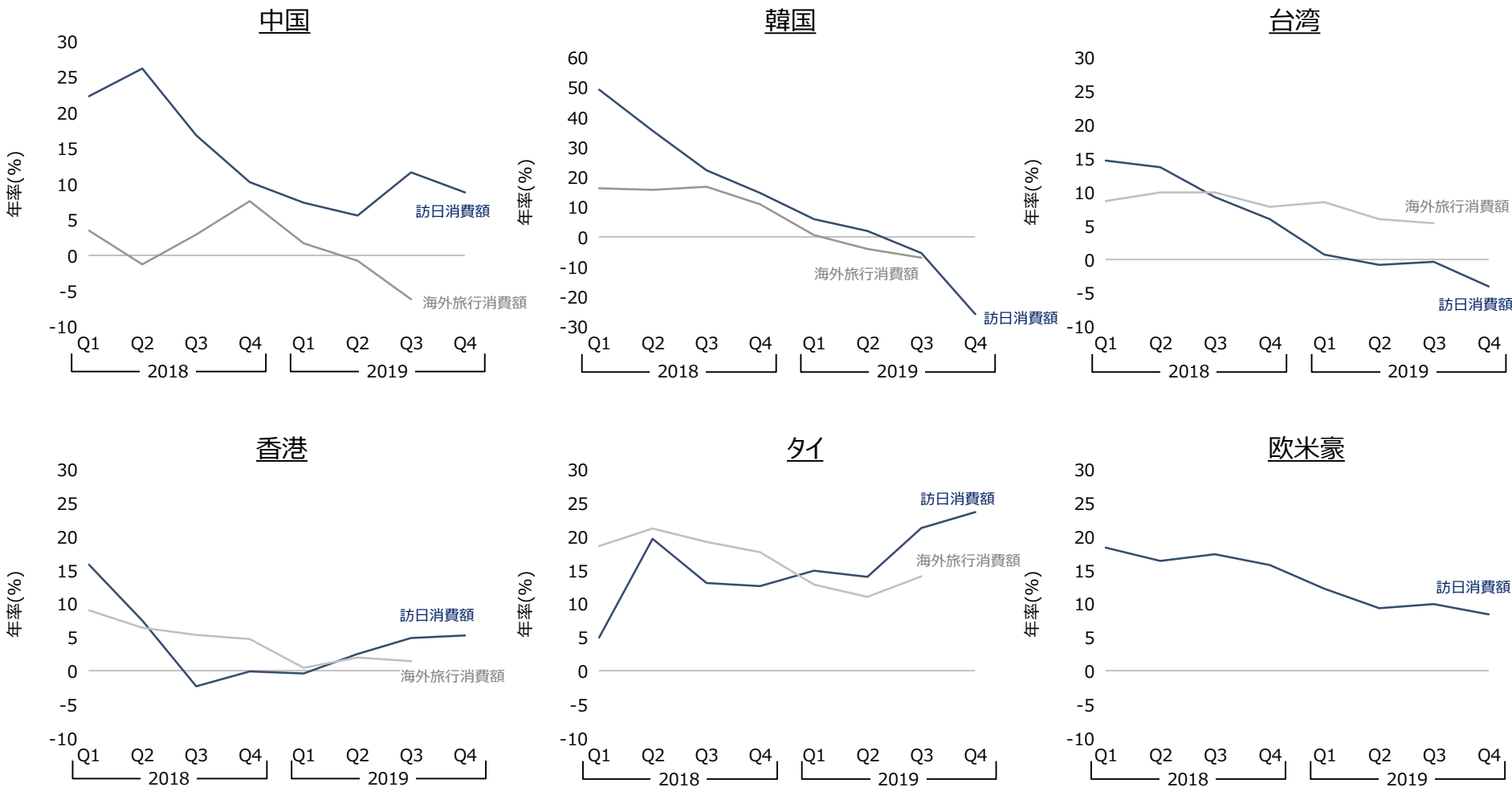
市場の成長率(消費額)

訪日消費額は中国、欧米豪に減速感

- 訪日消費額は香港、タイの伸び率が上向く一方、中国、欧米豪には減速感が漂い、台湾は旅行者数の反転増加とはうらはらに消費額のマイナス幅が拡大している。韓国は旅行者数の減少に伴い訪日消費額の下げ幅が拡大している。

この先、一人当たり消費単価の低下を懸念

- 訪日旅行者数の伸び率が持ち直しつつある(P14参照)一方で訪日消費額に関しては一部の市場に減速感が広がつつある。この先、旅行者一人当たり消費単価の低下傾向が強まることにならないか、慎重に見守る必要がある。



データ出所：P 13参照。2018年の消費額はクルーズ客を除く金額を訪日外国人消費動向調査の単価にもとづいて推計したもの。

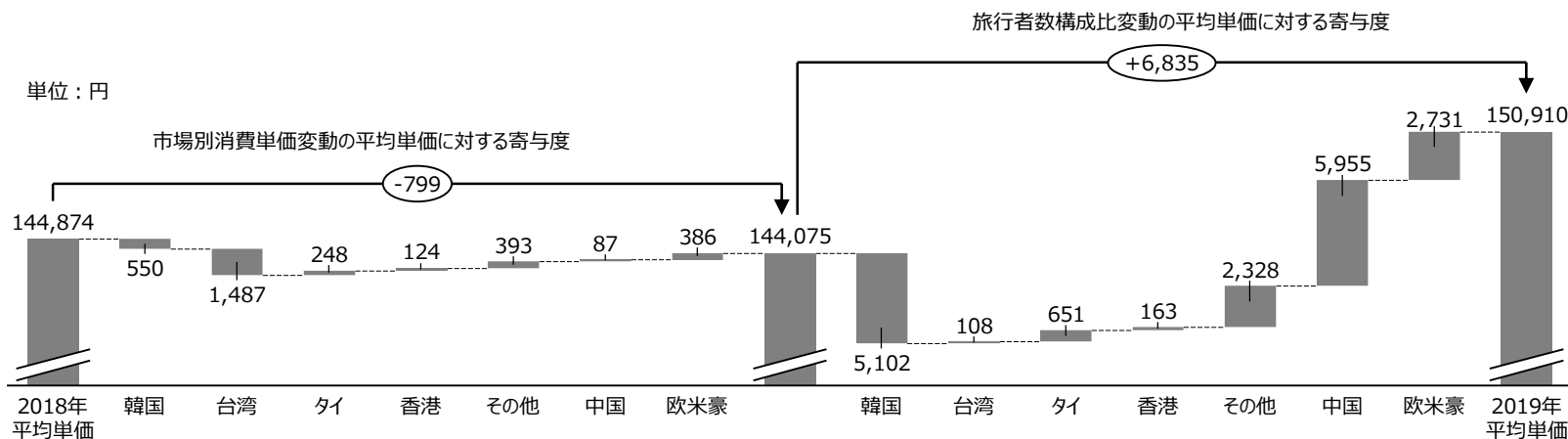
一人当たり消費単価の動向(2019年速報値)

平均単価の上昇は欧米豪など高単価の旅行者比率上昇によるもの
市場別にみた単価上昇の寄与度はわずか

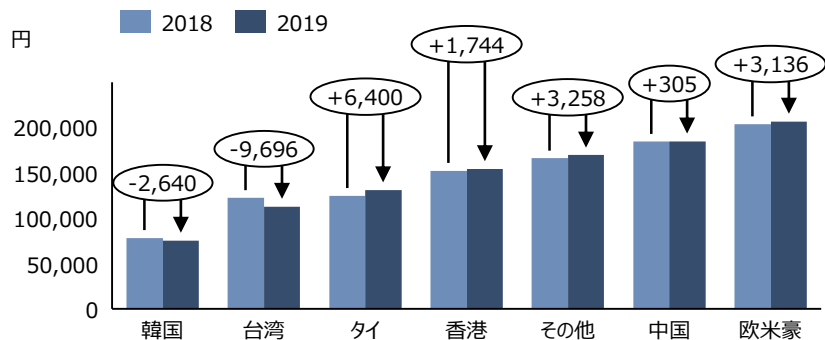
- 2019年の訪日旅行者一人当たり消費単価(速報値)は150,910円と2018年の144,874円に比べ約6,000円上昇、率にして4.2%増加した。
- 訪日客の平均単価を押し上げるのは各市場の消費単価の上昇ばかりではない。高単価の市場の旅行者比率が増えるだけでも平均単価は上昇する。

- 下のグラフ「市場別消費単価の変動」をみると、2019年に平均単価の上昇幅、約6,000円を上回って伸びたのはタイだけである。
- 一方、「市場別旅行者数構成比の変動」をみると、2019年は低単価の韓国が訪日旅行者数に占める割合が大きく減少し、高単価の欧米豪や中国の構成比が増加したことが分かる。
- 平均単価に対する寄与度を市場別単価と旅行者数構成比とに分解すると、市場別単価の寄与度はトータルするとマイナス(-799円)で、プラスの寄与度は旅行者数構成比の変動に由来している(6,835円)ことが分かる。

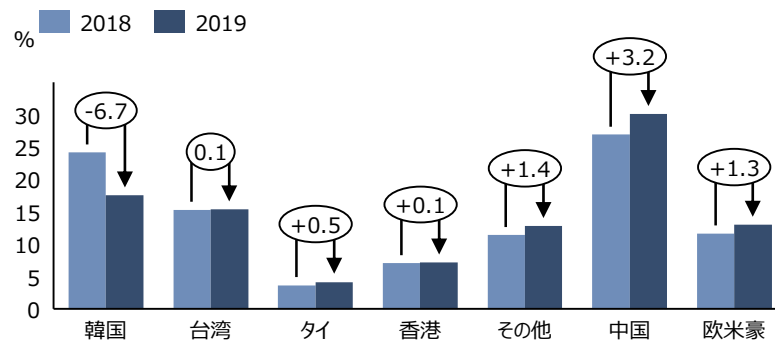
平均単価に対する市場別単価・旅行者数構成比の変動の寄与度



市場別消費単価の変動



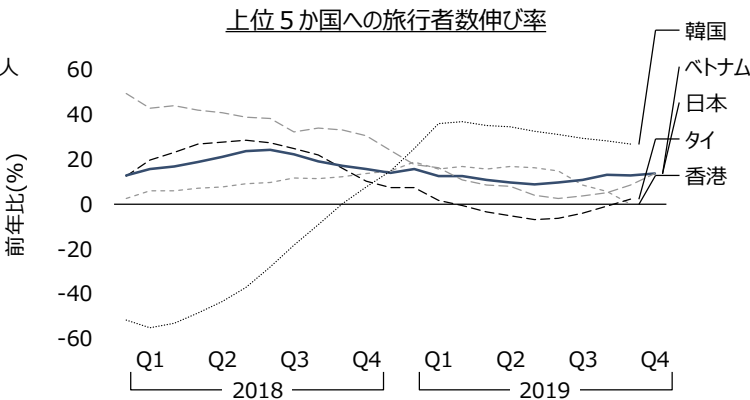
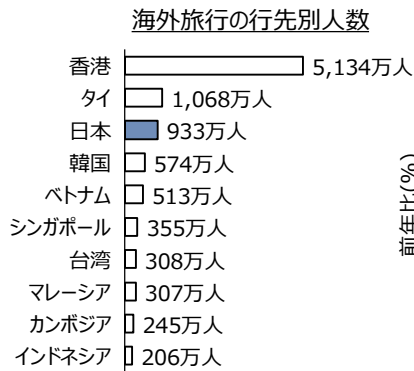
市場別旅行者数構成比の変動



(注)記載の単価は観光庁リリースの消費総額をクルーズ客を含む旅行者総数で割って算出したもの。

訪日競合国への旅行者数と成長率

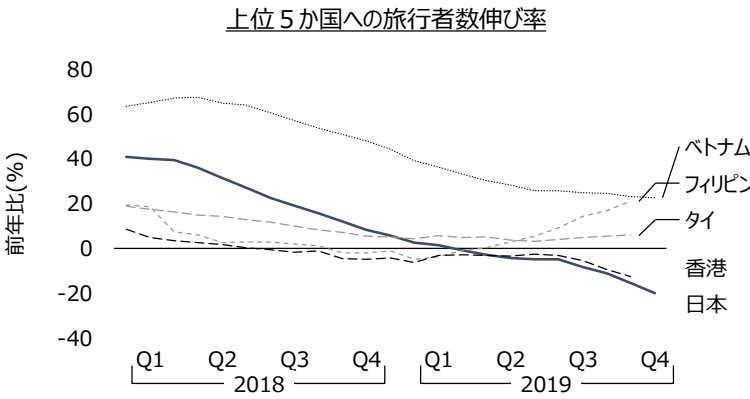
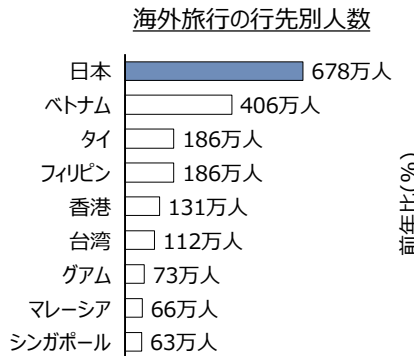
中国



中国発需要が加速に反転
タイ、ベトナムとともに日本もこの流れに乗る

- 2019年下期は中国からアジアの主要デスティネーションへの旅行者数が減速から加速へと反転したとみられる。
- タイ、ベトナムなどがこの流れに乗っており日本もこの流れを捉えている。現状、同程度の伸び率で日本と競っているのはベトナムである。
- 韓国は引き続き高い伸び率だが減速しつつある

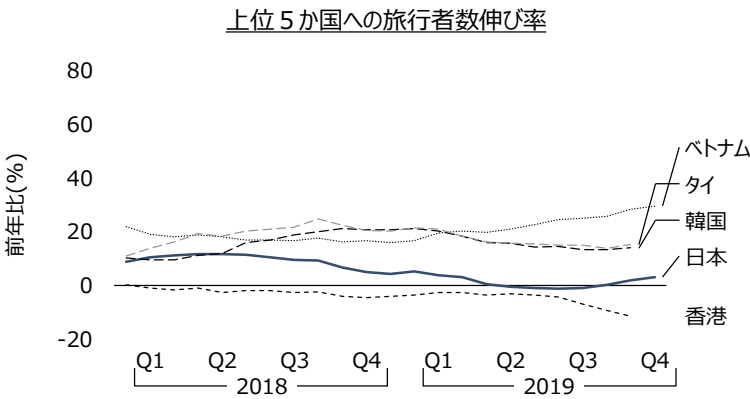
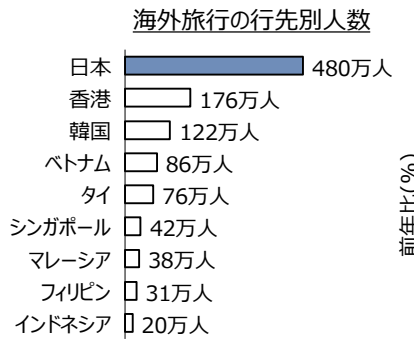
韓国



日本と香港が急減速
対照的にフィリピンが加速

- 日本と香港が急減速しており、対照的に加速しているのはフィリピンである。
- ベトナムの伸び率は依然として高いが緩やかに減速しつつある。

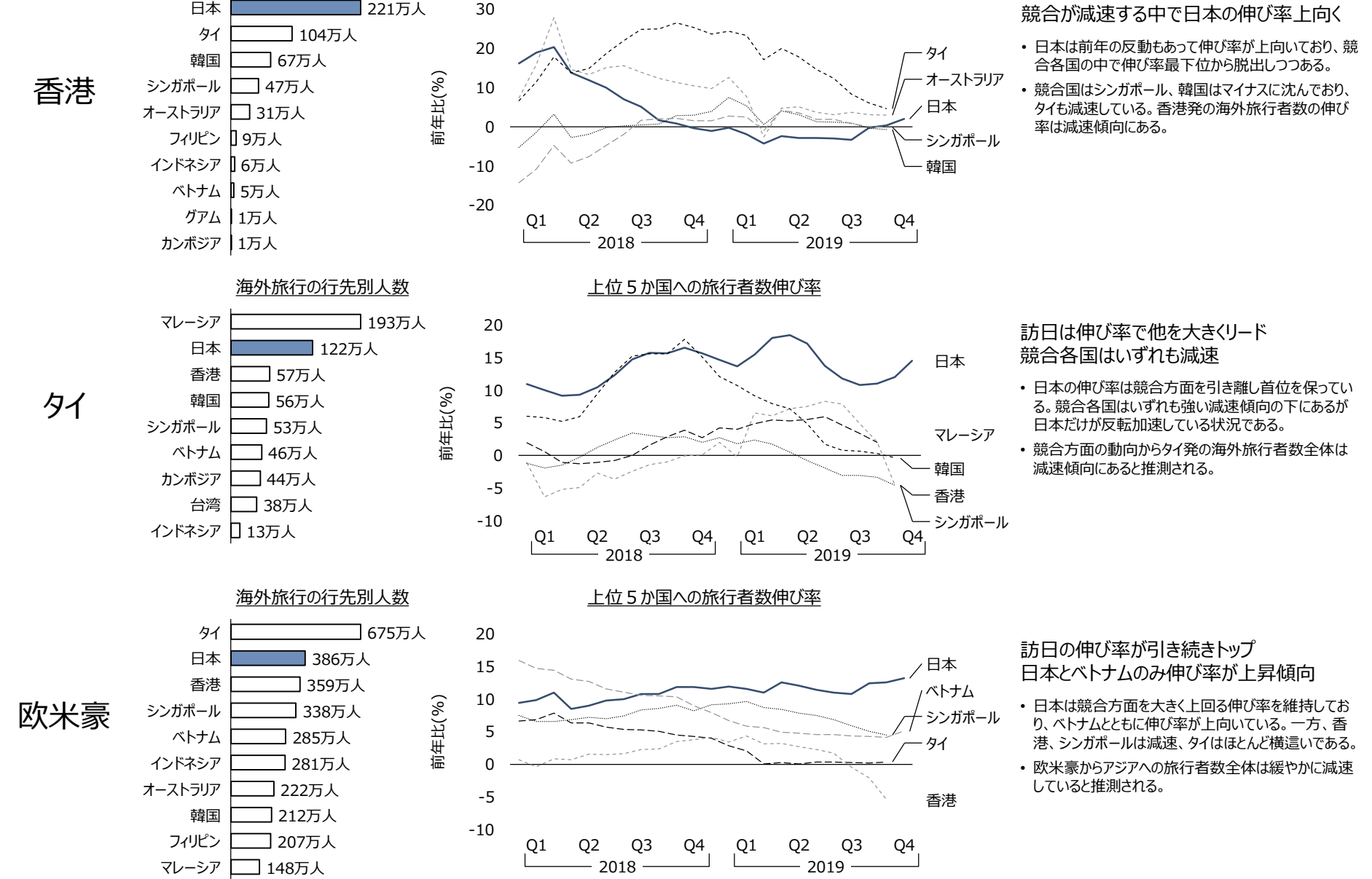
台湾



日本の伸び率が反転上昇へ
ベトナムと日本のみが伸び率上昇中

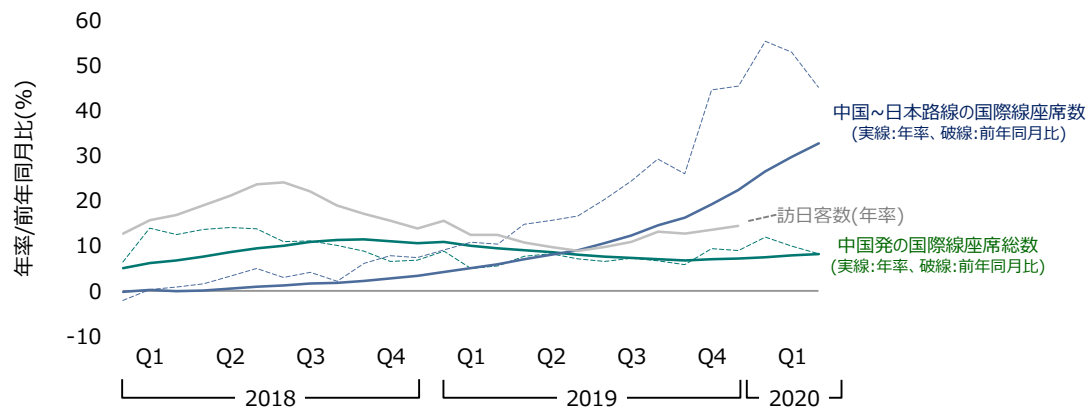
- 日本は減速から加速へと切り替わりつつある。2019年下期に伸び率が上昇しているのは日本とベトナムのみとなっている。
- 香港は急減速、タイ、韓国は横這いである。台湾発の海外旅行者数自体が減速傾向にある。

訪日競合国への旅行者数と成長率（つづき）



国際線座席数の推移からみた旅行者数の見通し

中国

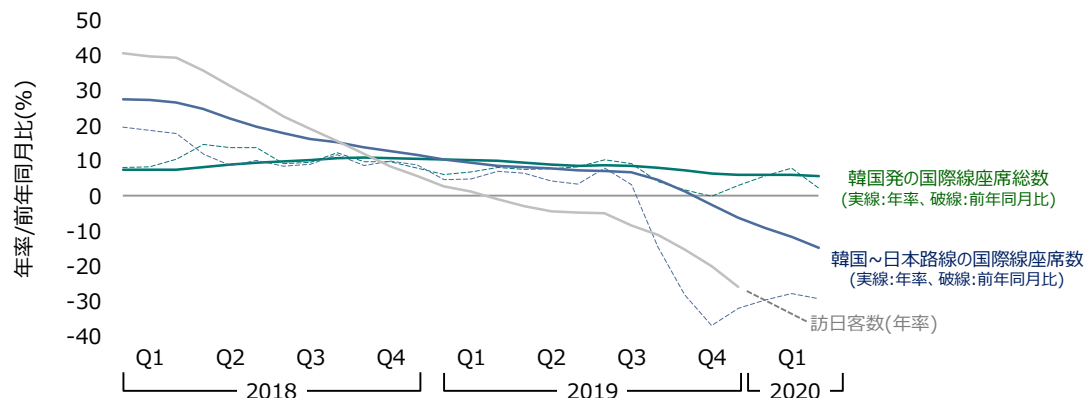


今後3か月の訪日旅行者数の見通し

中国～日本路線の座席数は急伸
一方で訪日客数の伸びは座席数の増加に追いつかず

- 2019年の後半から中国～日本路線の航空座席数が中国側航空会社の増便により急増している。
- 一方、訪日客数の伸び率は座席数の伸びに追いついておらず、日本発の需要も弱いと考えられることから、搭乗率が低下しているものと推定される。
- 2020年Q1については新型コロナウイルスの影響で座席数、訪日客数とも大幅な影響が予想される。(グラフの座席数は新型コロナウイルスの影響が顕在化する前のもの)

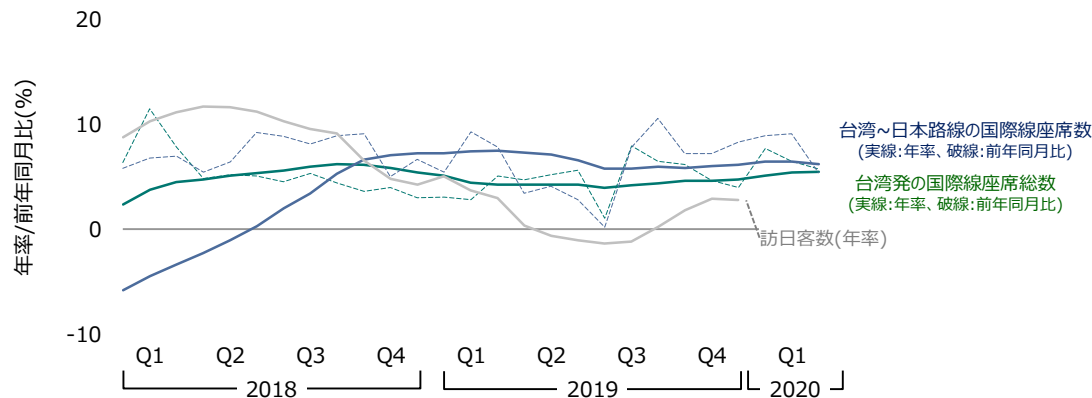
韓国



韓国～日本路線の座席数減少は2019年Q4が底
激減する訪日客数も底を打つか

- 韓国～日本路線の航空座席数は2019年Q3以降、訪日客の急減を反映し大きく減少している。
- 座席数の減少はQ4が底とみられ2020年Q1の先行座席数は減少幅が若干小さくなる見通しである。
- 訪日客数は前年同月比6割超の激減となっているが、2020年Q1に回復の兆しが見えてくる可能性がある。

台湾

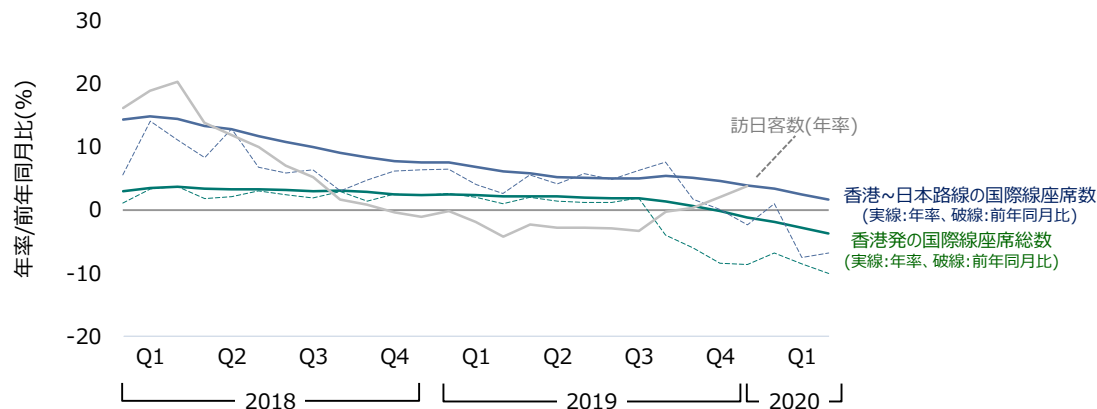


台湾～日本路線の座席数は安定的な伸びを維持
訪日客数も底堅い伸びを維持する見通し

- 台湾～日本路線の航空座席数は台湾発の国際線座席総数の伸び率を若干上回って推移しており、2020年Q1も安定した伸びが期待される。
- 訪日客数は2019年下期に伸び率が回復しており、2020年Q1も底堅い伸びを維持すると予想される。

国際線座席数の推移からみた旅行者数の見通し(つづき)

香港



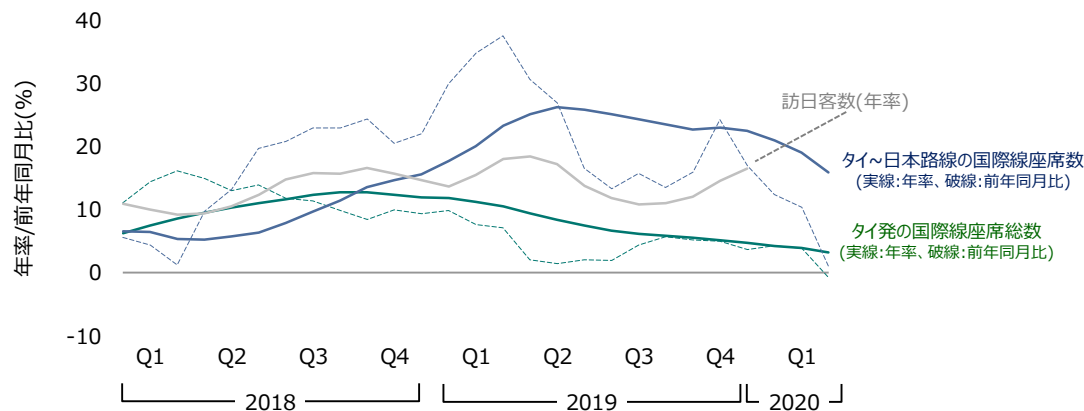
今後3か月の訪日旅行者数の見通し

香港発の国際線座席総数、香港～日本路線の座席数ともに減速

訪日客数の伸び率も低下の見通し

- 香港発の国際線座席総数は2019年下期に前年割れとなり、香港～日本路線の航空座席数の伸び率も急速に低下している。
- 2020年Q1の日本路線先行座席数は前年比マイナスとなる見通しである。訪日客数は2019年Q4にプラスに戻したが、今後の伸び率は低下してくるものと予想される。
- 新型コロナウイルスの影響については現時点で見通すことが困難である。

タイ



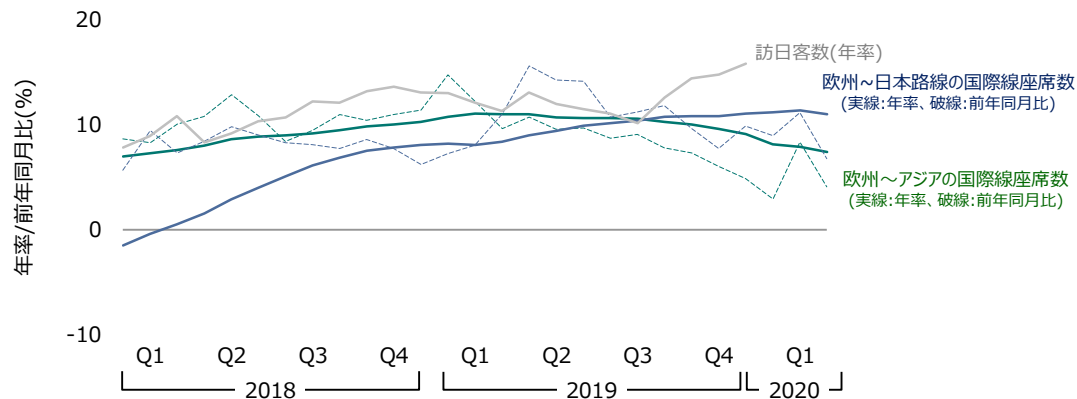
タイ～日本路線の座席数は高い伸び率ながら先行指標は減速傾向

訪日客数の伸び率も鈍化の見通し

- タイ発の国際線座席総数の伸び率は徐々に低下している。
- タイ～日本路線の航空座席数は国際線座席総数を大幅に上回る伸び率で推移しているが2020年Q1の先行座席数の伸びは減速傾向となっている。
- 訪日客数の伸び率は2019年Q4に上昇したが2020年Q1の伸び率は鈍化してくるものと予想される。

国際線座席数の推移からみた旅行者数の見通し(つづき)

欧州

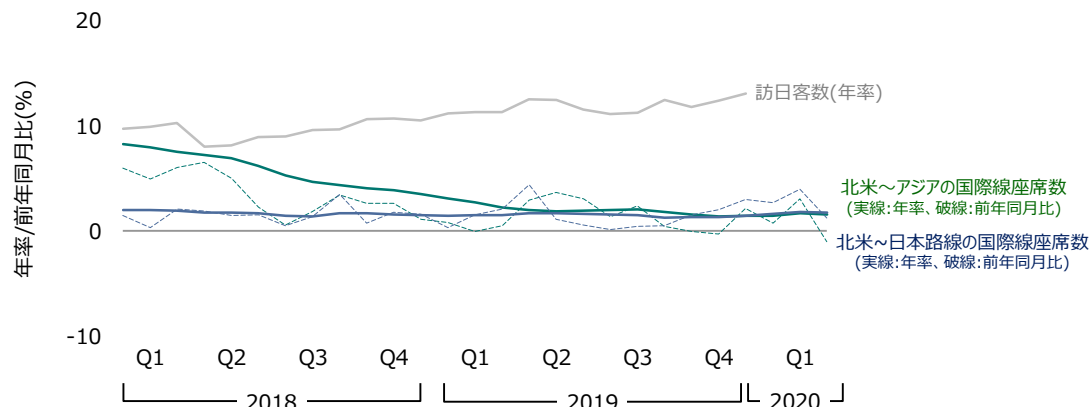


今後3か月の訪日旅行者数の見通し

欧州～日本路線の座席数は高水準の伸び率を維持
訪日客数の伸び率も10%を上回る水準を維持する見通し

- 欧州～アジアの国際線座席数は伸び率が徐々に下がってきている。その一方で欧州～日本路線の航空座席数は二桁台の伸び率を保っている。
- 訪日客数は2019年秋のラグビーワールドカップ開催を背景に伸び率が上昇しているが、2020年Q1についても10%を上回る水準を維持するものと予想される。

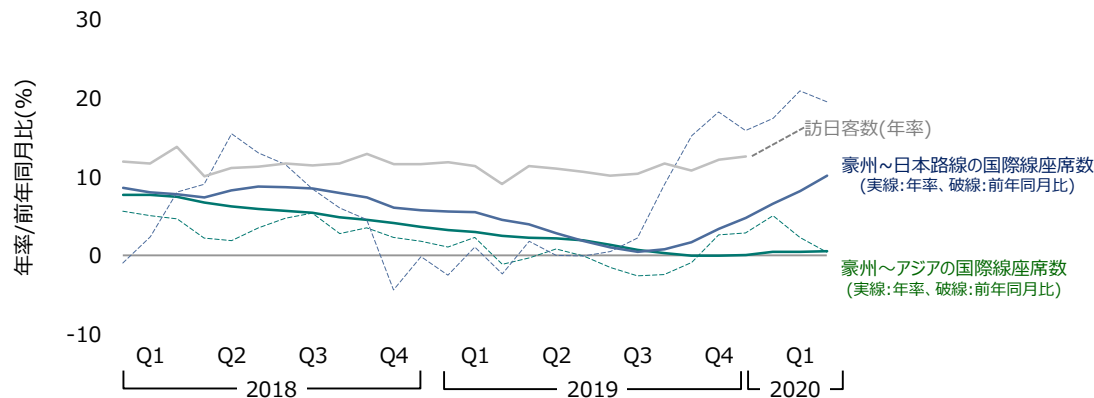
北米



北米～日本路線の座席数は低率ながら堅調な伸びを維持
訪日客数は10%超の伸び率を保って推移の見通し

- 北米～日本路線の航空座席数は北米～アジアの国際線座席数とほとんど同率でプラスを維持している。伸び率は低いけど底堅く増加基調を保っている。
- 訪日客数は経路便等の利用率が高いため北米～日本路線の座席数伸び率をはるかに上回る水準で推移している。2020年Q1についてもこのまま高水準の伸び率を保つものと予想される。

豪州



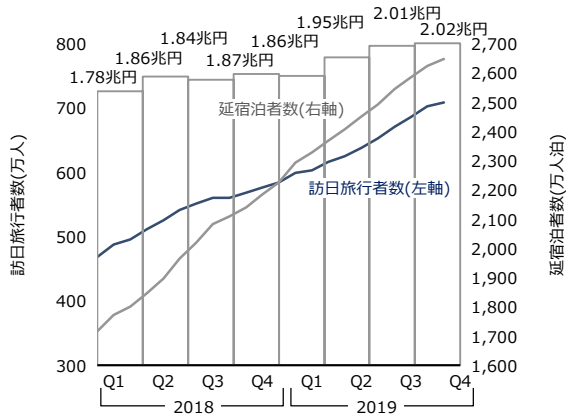
増便により豪州～日本間の座席数は好調な伸び
訪日客数も伸び率上昇の見通し

- 豪州～日本間の航空座席数は2019年冬スケジュールからの増便で前年比20%近い増加となっている。
- 訪日客数も2019年Q4に上向いており、2020Q1についても加速が期待される。

訪日需要の推移 – 実数(旅行者数、延宿泊者数、消費額)

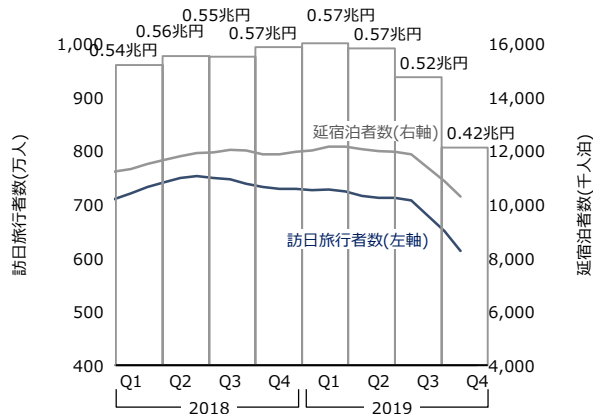
中国

- 旅行者数、延宿泊者数ともに高い伸び率で推移しており、消費額もプラスで推移している。



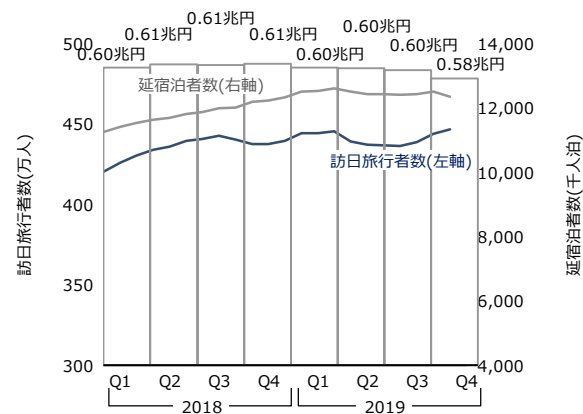
韓国

- 2019年Q3以降、旅行者数、延泊数、消費額とも減少している。



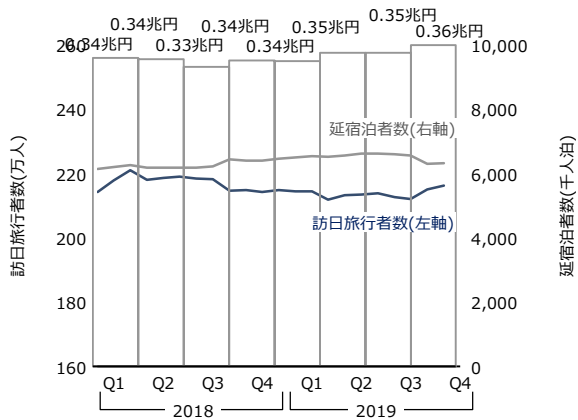
台湾

- 旅行者数、延泊数、消費額ともにほとんど横這いである。



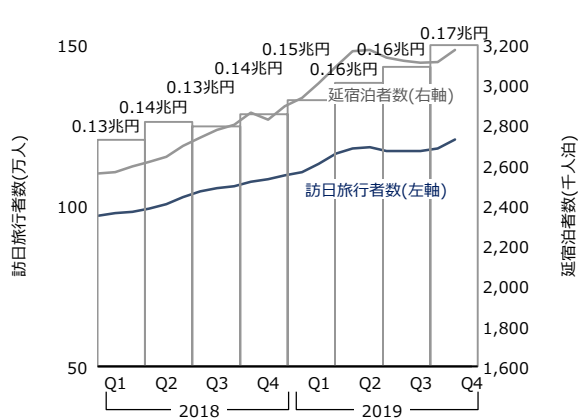
香港

- 旅行者数、延泊数、消費額ともにほとんど横這いである。



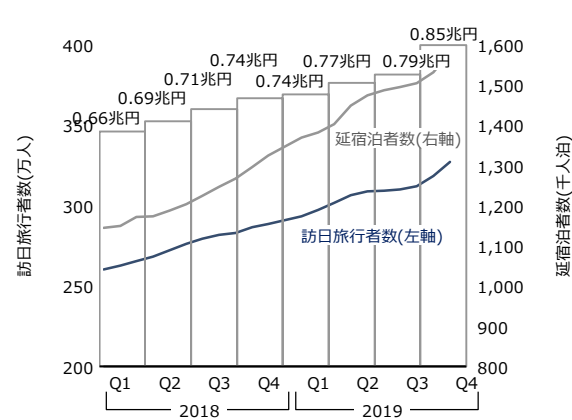
タイ

- 旅行者数の増加傾向は2019年半ばに頭打ちとなったかに見えるがQ4に入って再び増加、延泊数も同様の推移である。消費額は増加傾向を保っている。



欧米豪

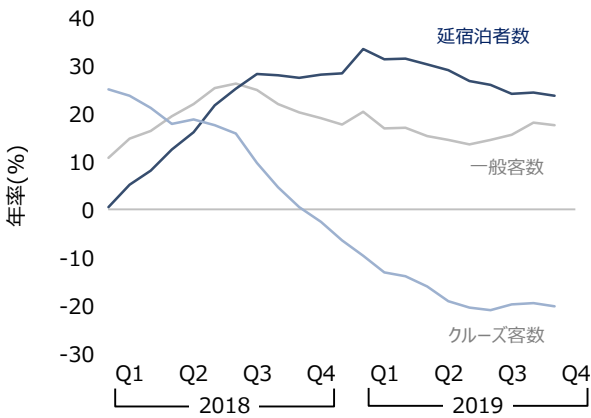
- 旅行者数、延宿泊者数ともに伸びており、訪日消費も増加傾向を保っている。



訪日需要の推移 – 成長率（旅行者数、延宿泊者数）

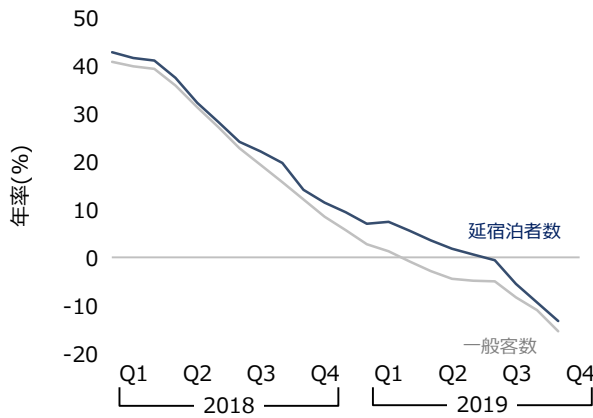
中国

クルーズ客の減少が訪日客全体の伸び率を引き下げる要因となっている。一般客の伸び率は2019年半ばに減速から加速へと切り替わった。一方、延泊数の伸び率は徐々に低下している。



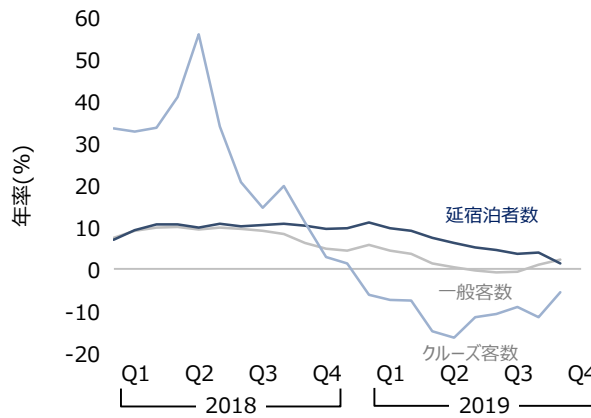
韓国

一般客数、延泊数ともにマイナスとなっている。



台湾

クルーズ客の減少が続いているがマイナス幅は縮小してきている。一般客数の伸び率は2019年半ばに減速から加速へと切り替わったが延泊数の伸び率は低下が続いている。



香港

一般客数、延宿泊者数とも大幅に減速して前年割れとなっている。



タイ

一般客数の伸び率は2019年半ばに大きく減速した後、やや持ち直しつつある。延泊者数も概ね同様の傾向である。



欧米豪

一般客数の伸び率は10%前後で概ね横這いである。延宿泊者数は一般客数を大きく上回る伸び率で推移している。



(注)韓国、香港、タイ、欧米豪についてはクルーズ客の数が少なく訪日客数全体の推移に与える影響が小さいため伸び率を掲載していない。
データ出所：一般客とは出入国管理統計上の定住者を除く正規入国者、クルーズ客は同統計の特例上陸者のうち寄港地上陸、船舶観光上陸、通過上陸の計。延宿泊者数は観光庁「宿泊旅行統計」。

3.地域別市場動向

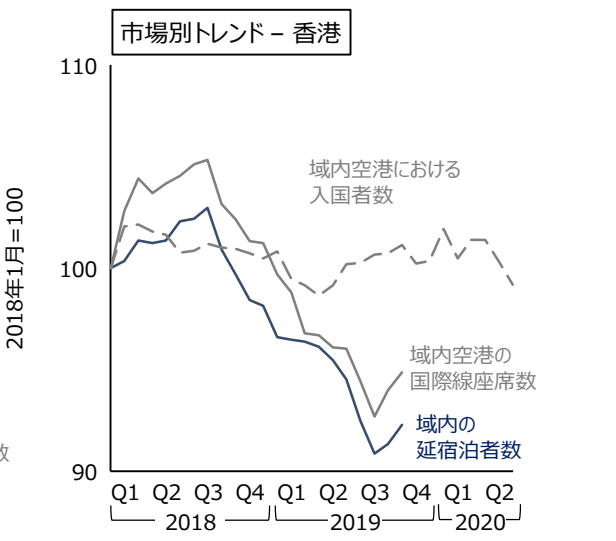
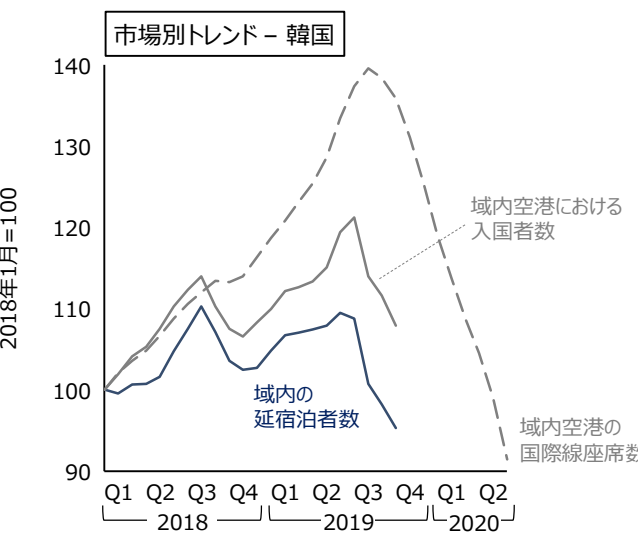
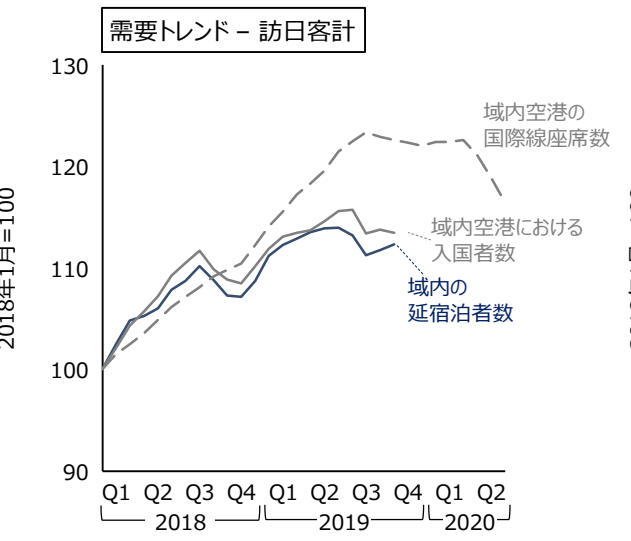
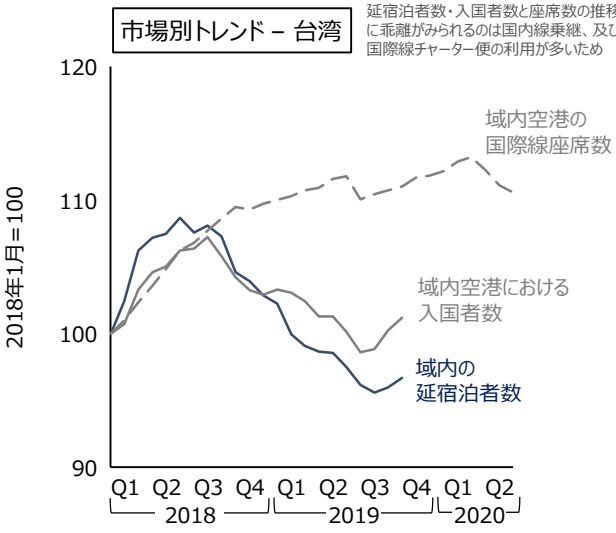
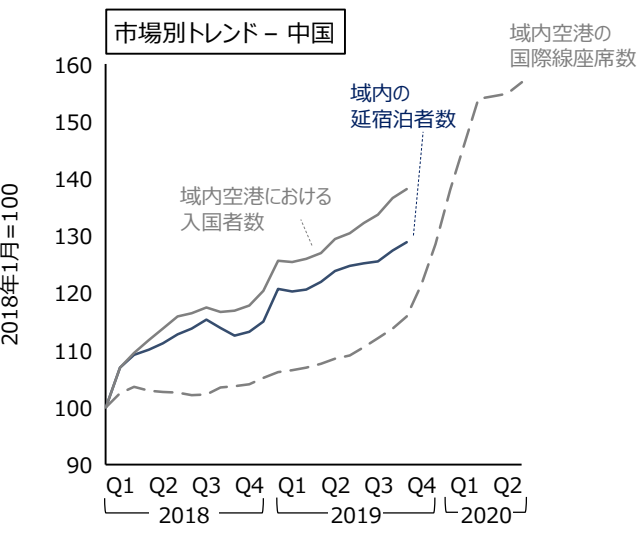
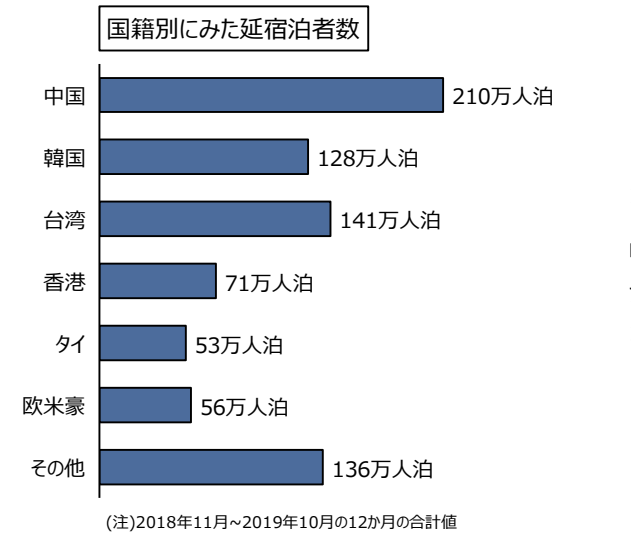
このセクションでは各地域における外国人の延宿泊者数の推移と域内空港における入国者数、及び国際線座席数の推移をもとに推定した今後3か月の見通しを掲載しています。また、中国、台湾、韓国、香港、欧米豪など上位の市場について延宿泊者数の推移と見通しを述べています。

地域別市場動向 - 北海道

現状は韓国の急減に加え、台湾、香港も前年の水準まで需要が回復せず、前年比減が続いている。今後は中国が減少に転じるためトータルの需要は前年比減が続く見通し。

中国 現状は大幅な増加だが今後は新型コロナウイルスの影響で減少に転じる見通し。
韓国 現状は大幅な減少で今後についても減少が続く見通し。

台湾 前年同期比では減少だがトレンドは2019年Q3に反転しており、今後、前年同期並みの水準まで戻す見通し。
香港 前年同期比では減少だがトレンドは2019年Q3に反転、今後も上昇が続くが前年同期には届かずマイナスが続く見通し。



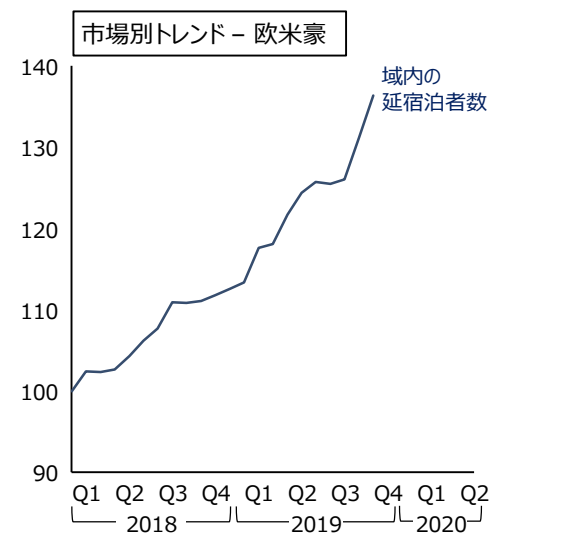
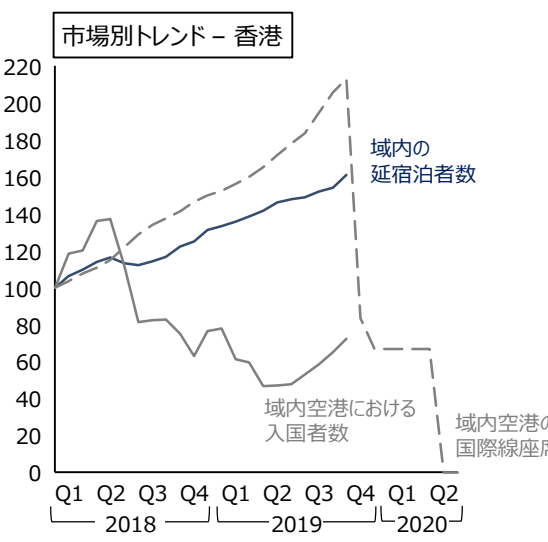
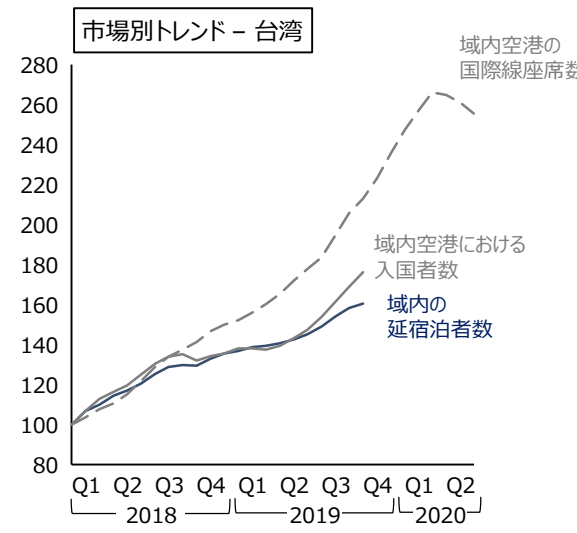
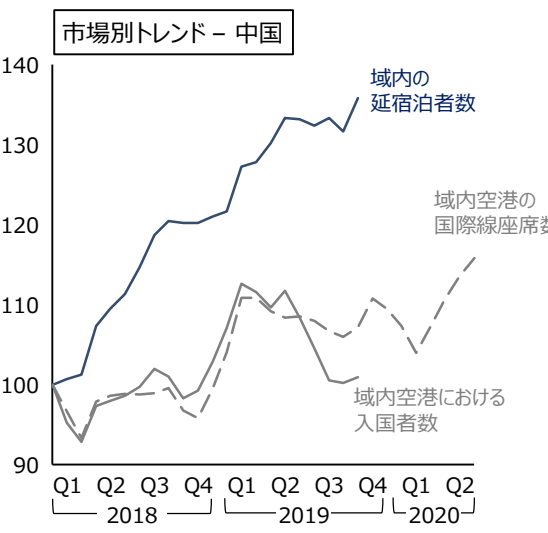
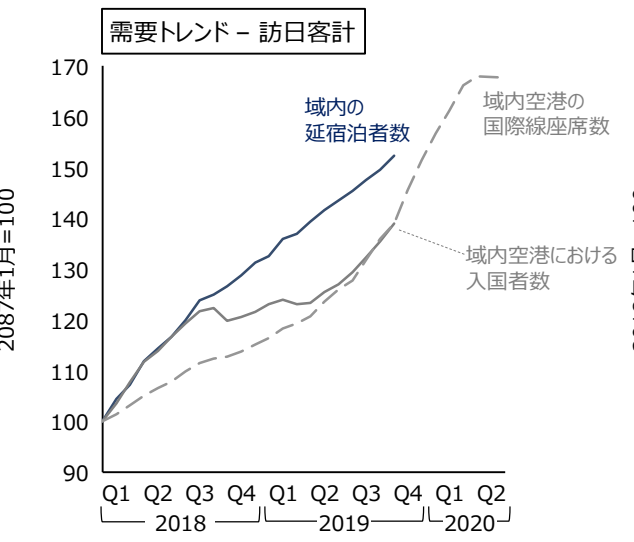
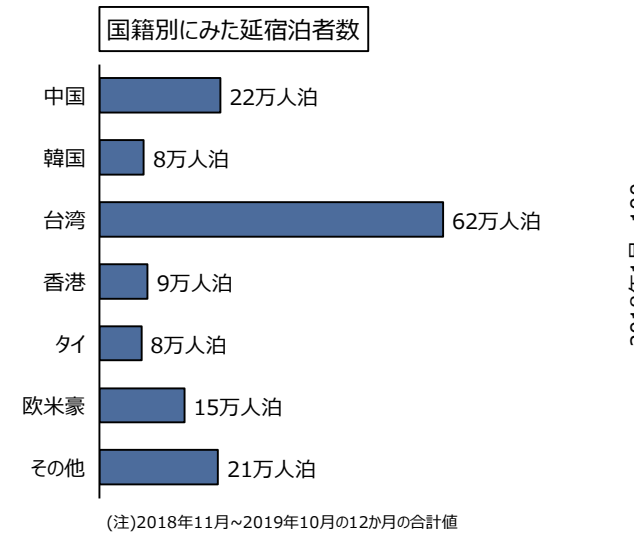
(注)線グラフは12か月移動累計値を2018年1月を100とする指数で示したものの。
データ出所：延宿泊者数は観光庁「宿泊旅行統計」、入国者数は法務省「出入国管理統計」、国際線座席数はOAG。

地域別市場動向 - 東北

現状は台湾や欧米豪の伸びに支えられ、トータルの需要は大幅な伸びが続いている。今後は中国、香港などが減少に転じるため伸びが鈍化する見通し。

中国 現状は増加しているが今後は新型コロナウイルスの影響で減少に転じる見通し。
香港 現状は大幅な増加だが今後は減少に転じる見通し。

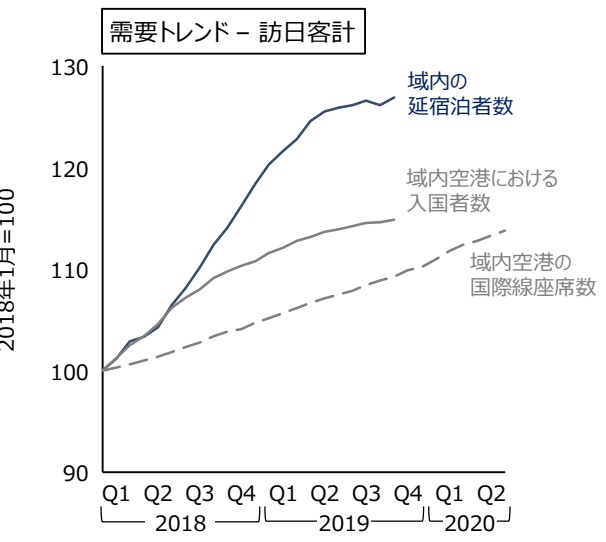
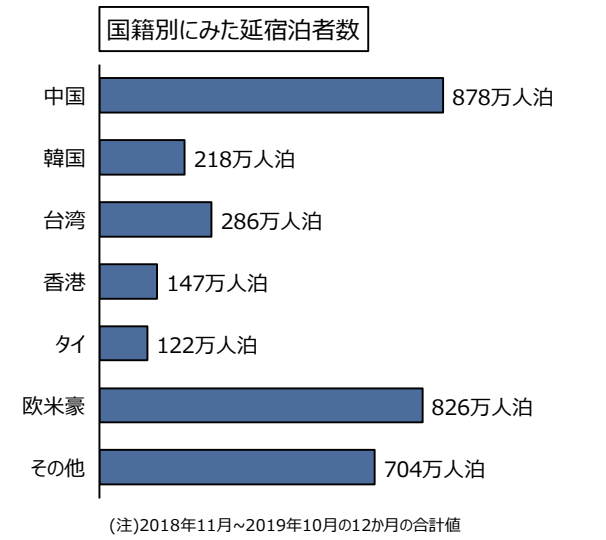
台湾 現状は大幅な増加で今後も増加が続く見通し。
欧米豪 現状は大幅な増加が続いている。
(注) 欧米豪については域内空港への直行便乗り入れがないため見通し判断をしていない。



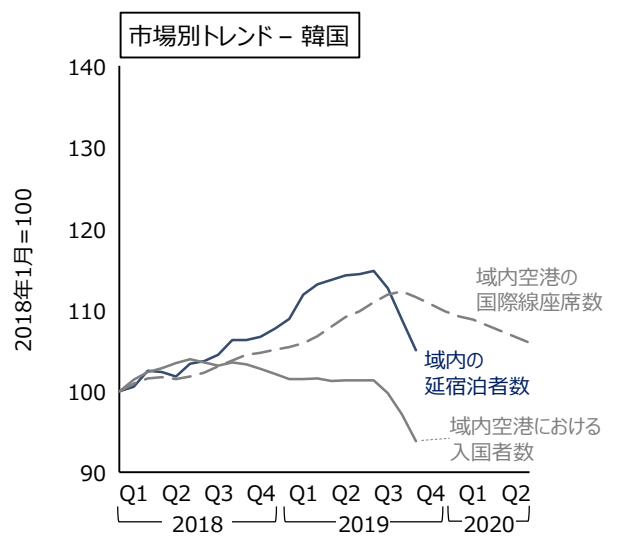
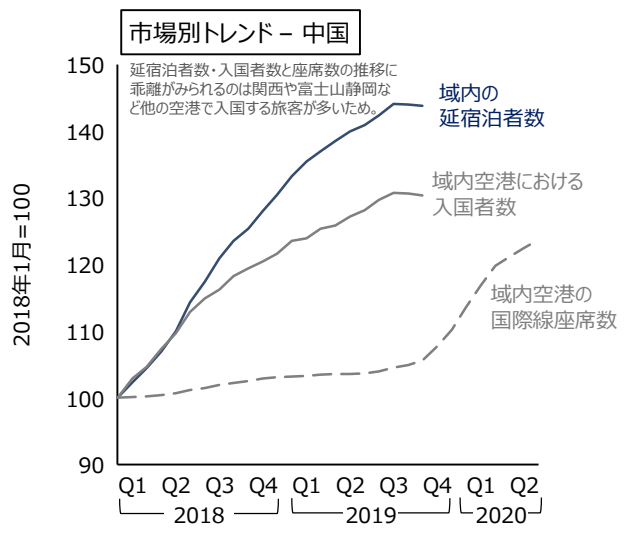
(注)線グラフは12か月移動累計値を2018年1月を100とする指数で示したものの。
データ出所：延宿泊者数は観光庁「宿泊旅行統計」、入国者数は法務省「出入国管理統計」、国際線座席数はOAG。

地域別市場動向 - 関東

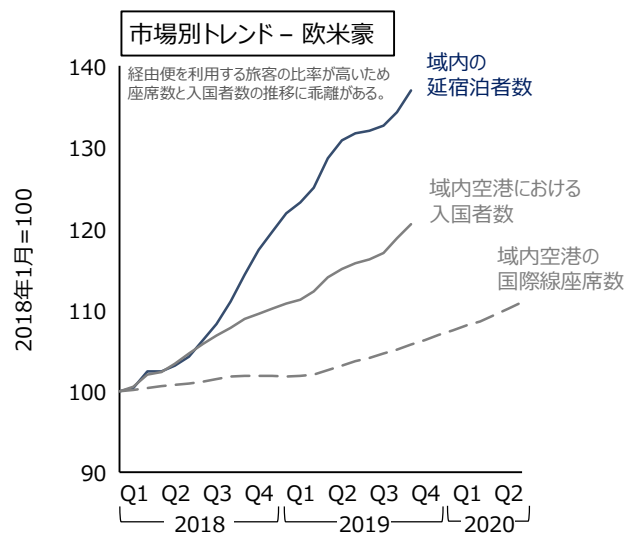
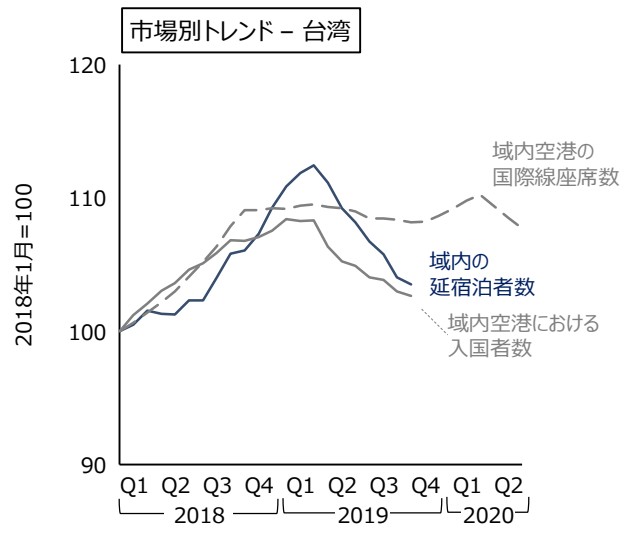
現状は韓国、台湾などが減少する一方で中国、欧米豪の増加でトータルの需要は緩やかな増加を維持している。今後は中国が減少に転じるためトータルの需要も減少に転じる見通し。



中国 現状は増加しているが今後は新型肺炎の影響で減少に転じる見通し。
韓国 現状は大幅な減少で今後も減少が続く見通し。



台湾 現状は大幅な減少だが台湾からの訪日客数全体は上向いており今後は下げ止まる見通し。
欧米豪 現状は大幅な増加で今後も増加が続く見通し。



(注)線グラフは12か月移動累計値を2018年1月を100とする指数で示したものです。
データ出所：延宿泊者数は観光庁「宿泊旅行統計」、入国者数は法務省「出入国管理統計」、国際線座席数はOAG。

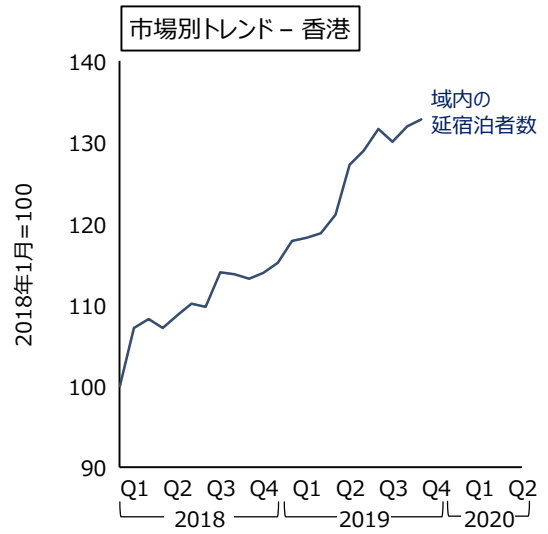
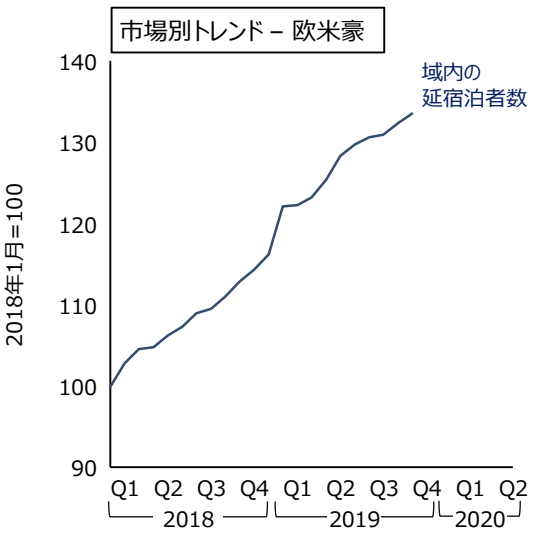
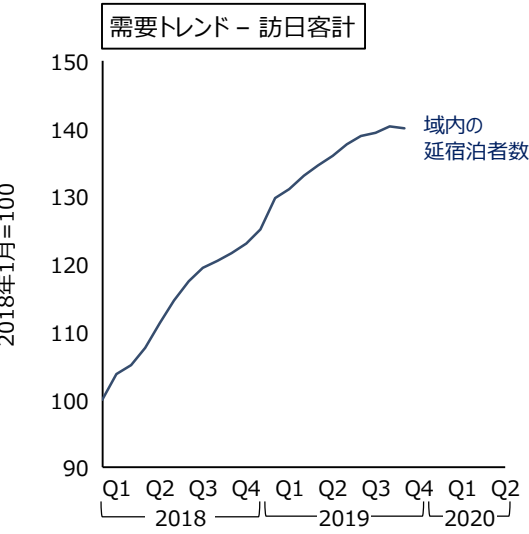
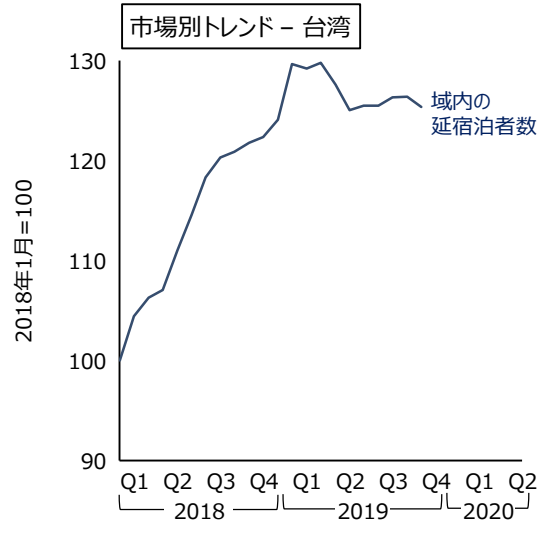
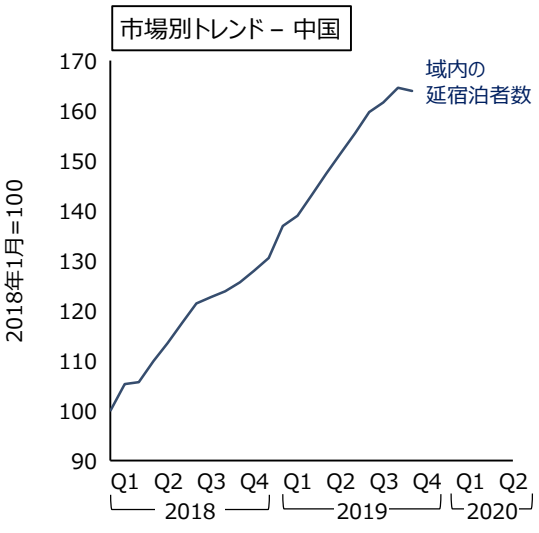
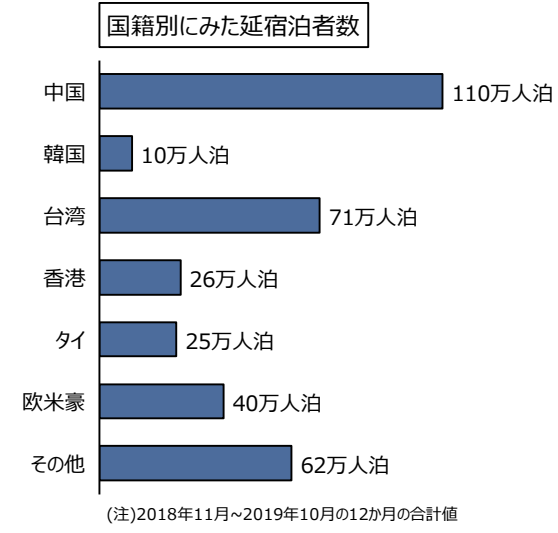
地域別市場動向 - 甲信越

現状は中国、欧米豪、香港などのけん引でトータルの需要は大幅な増加が続いている。

中国 現状は大幅な増加が続いている。
欧米豪 現状は大幅な増加が続いている。

台湾 現状は踊り場となっている。
香港 現状は大幅な増加が続いている。

(注)甲信越については陸路で流入する旅行者数が圧倒的に域内空港の座席数推移をもとに見通しを判断することが困難であるため見通しを記載していない。



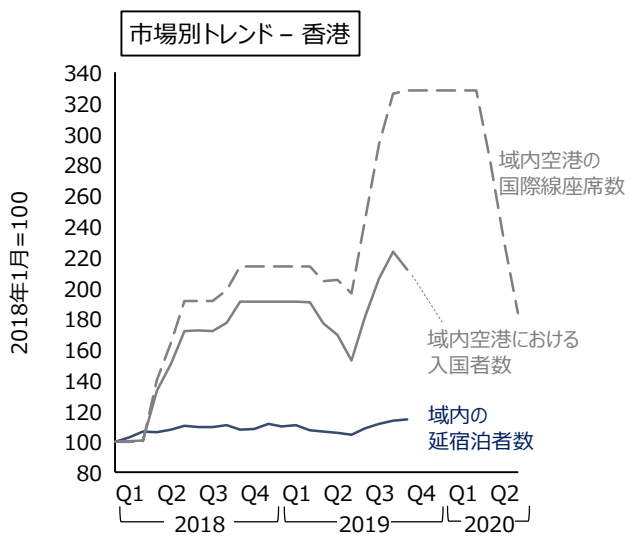
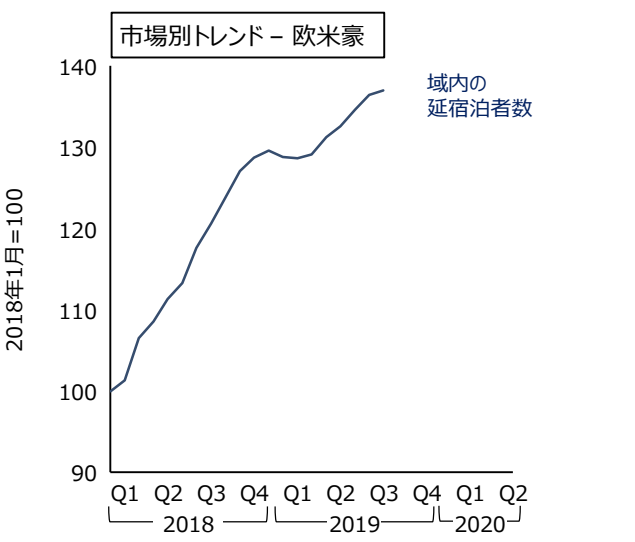
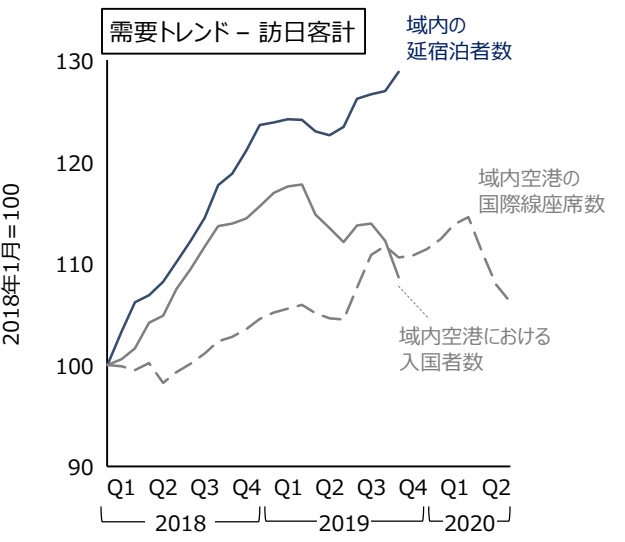
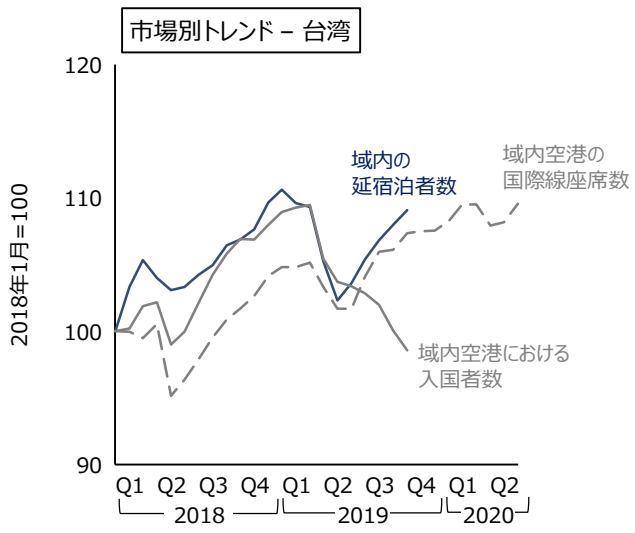
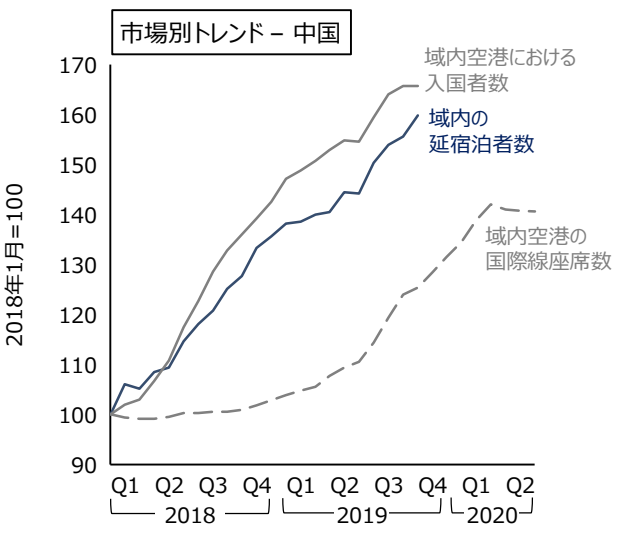
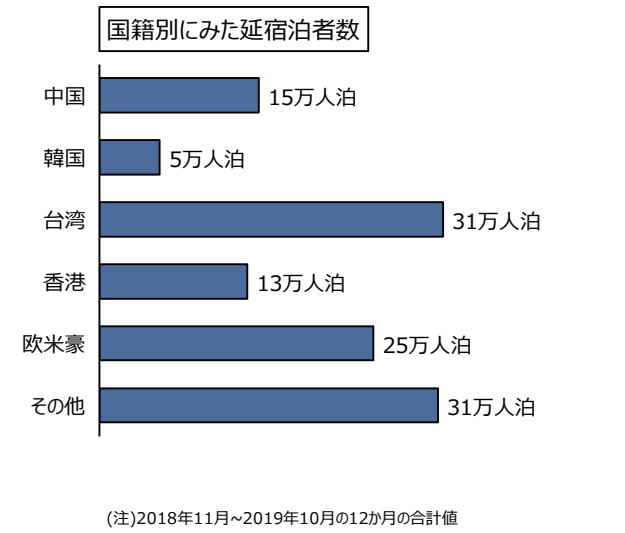
(注)線グラフは12か月移動累計値を2018年1月を100とする指数で示したもの。
データ出所：延宿泊者数は観光庁「宿泊旅行統計」、入国者数は法務省「出入国管理統計」、国際線座席数はOAG。

地域別市場動向 - 北陸

現状は台湾、欧米豪、中国などの需要が伸び、トータルの需要は大幅な増加となっている。今後は中国、香港などが減少に転じるため、トータルの需要増も鈍化する見通し。

中国 現状は大幅な増加が続いているが今後は新型肺炎の影響で減少に転じる見通し。
欧米豪 現状は大幅な増加が続いている。
(注) 欧米豪については域内空港への直行便乗り入れがないため見通し判断をしていない。

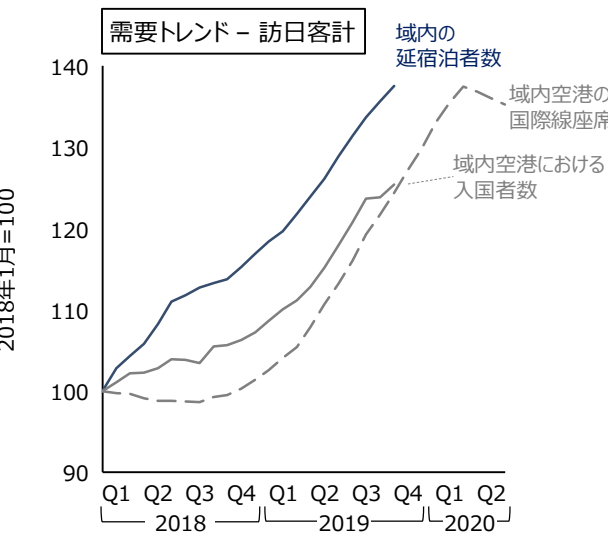
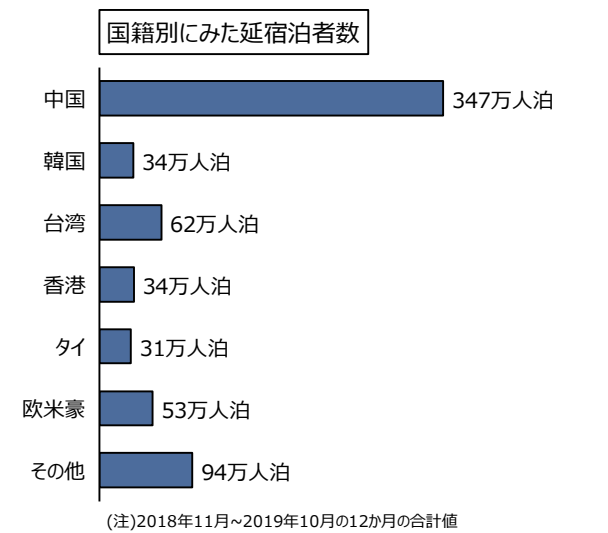
台湾 現状は大幅な増加で今後も増加が続く見通し。
香港 現状は大幅な増加だが今後は減少に転じる見通し。



(注) 線グラフは12か月移動累計値を2018年1月を100とする指数で示したものです。
データ出所：延宿泊者数は観光庁「宿泊旅行統計」、入国者数は法務省「出入国管理統計」、国際線座席数はOAG。

地域別市場動向 - 東海

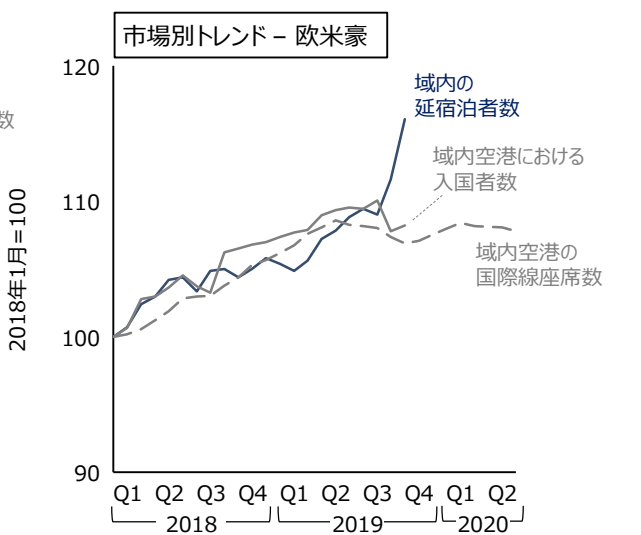
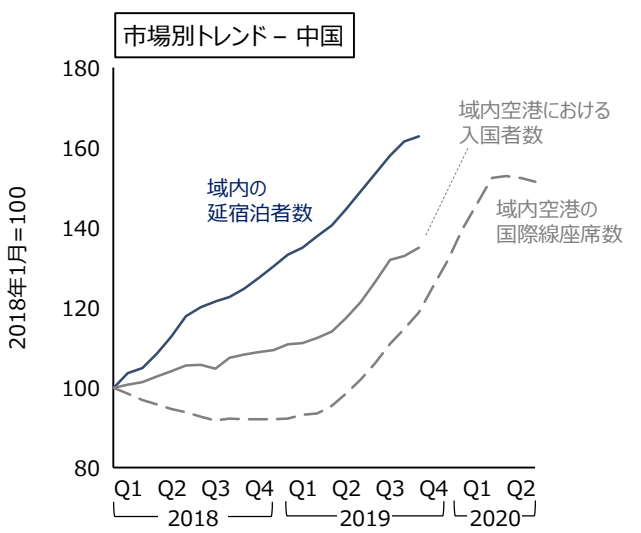
現状は中国の伸びで大幅な増加となっている。今後は中国が減少に転じることでトータルの需要も減少に転じる見通し。



(注)線グラフは12か月移動累計値を2018年1月を100とする指数で示したものの。
データ出所：延宿泊者数は観光庁「宿泊旅行統計」、入国者数は法務省「出入国管理統計」、国際線座席数はOAG。

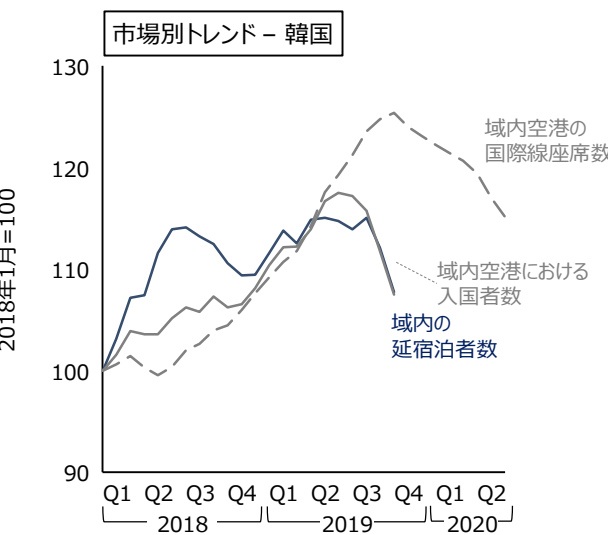
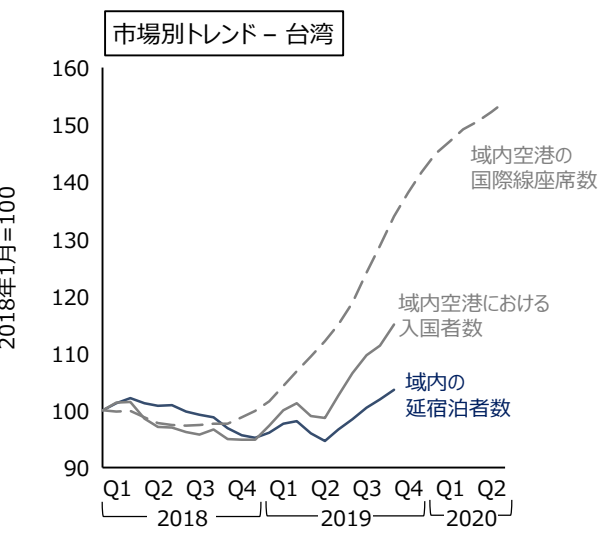
中国 現状は大幅な増加が続いているが今後は新型コロナウイルスの影響で減少に転じる見通し。

欧米豪 現状は大幅な増加が続いている。陸路流入の旅行者が増加しているとみられ、欧米豪から日本への旅行者全体は増加が続くとみられることから、今後も増加が続く見通し。



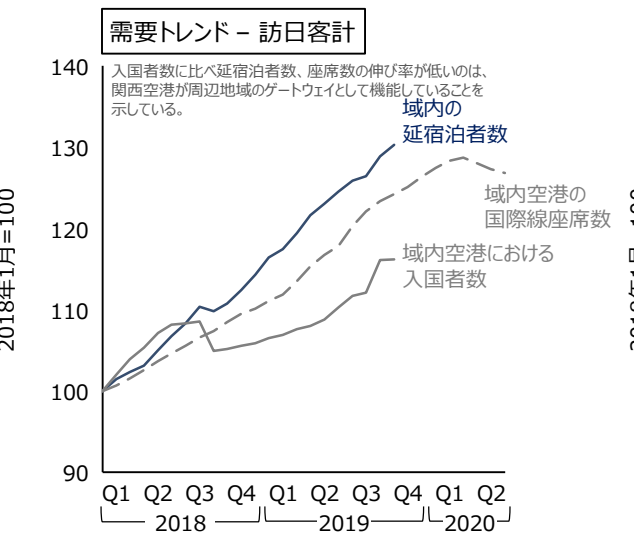
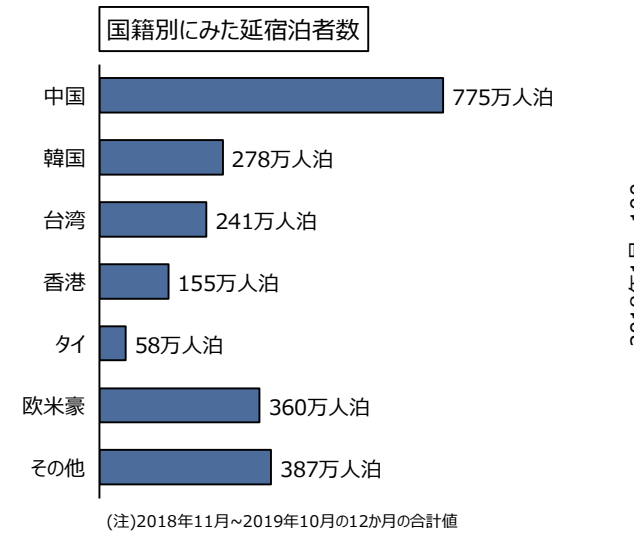
台湾 現状は大幅な増加が続いている。今後も増加が続く見通し。

韓国 現状は大幅な減少となっており今後も減少が続く見通し。



地域別市場動向 - 近畿

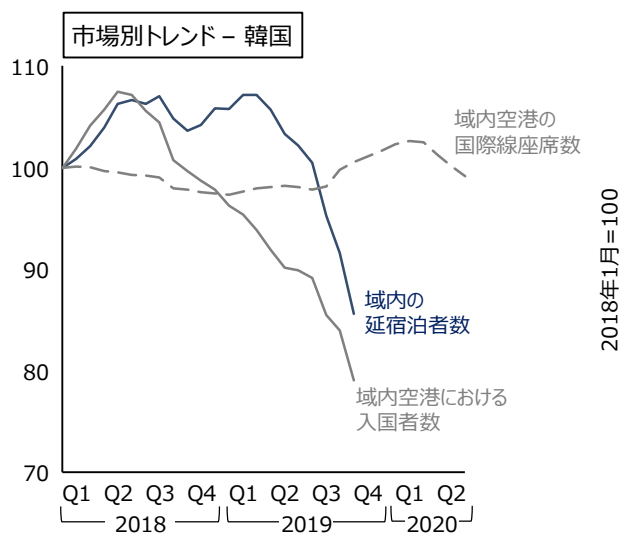
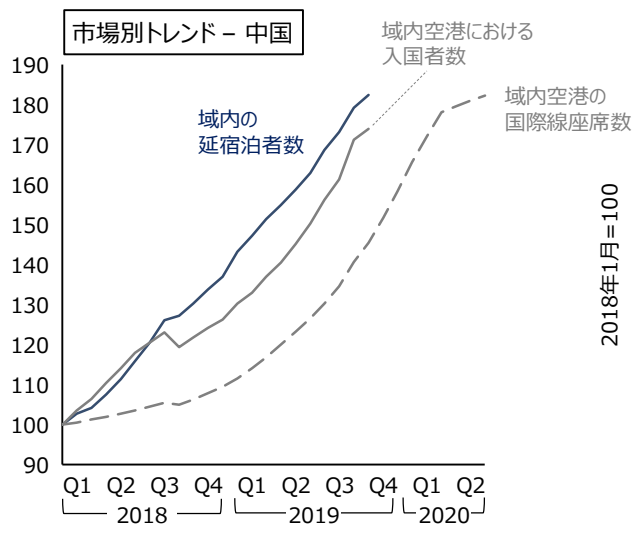
現状は中国、欧米豪などの伸びで大幅な増加が続いている。今後は欧米豪などの増加が下支えするが、中国が減少に転じ韓国との減少が続くためトータルの需要も伸びが鈍る見通し。



(注)線グラフは12か月移動累計値を2018年1月を100とする指数で示したもの。
データ出所：延宿泊者数は観光庁「宿泊旅行統計」、入国者数は法務省「出入国管理統計」、国際線座席数はOAG。

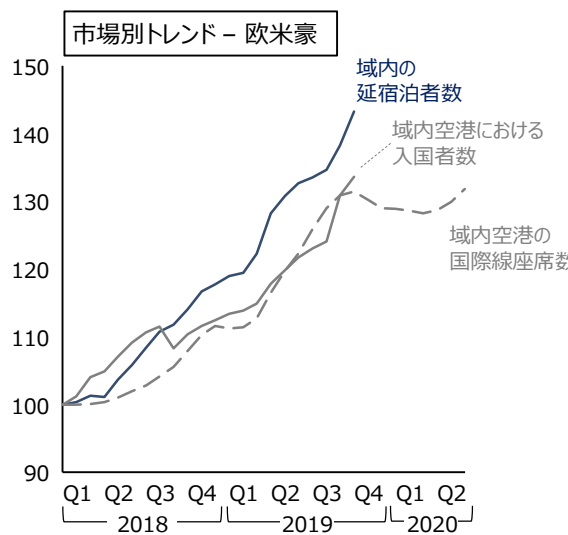
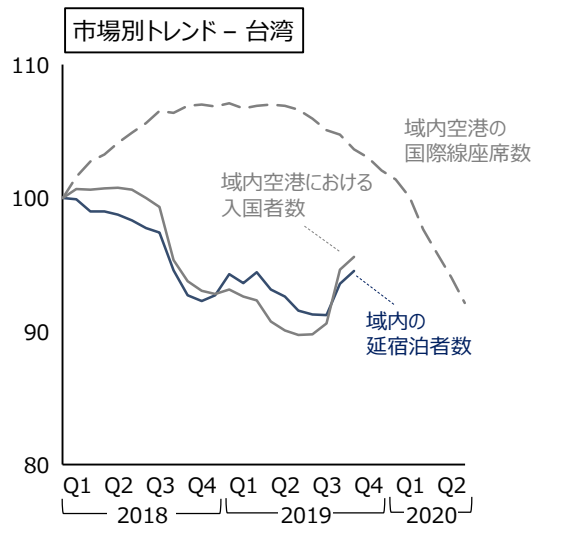
中国 現状は大幅な増加が続いているが今後は新型コロナウイルスの影響で減少に転じる見通し。

韓国 現状は大幅な減少が続いている。今後も減少が続くとみられるが、国際線座席数は上向いているため下げ幅は縮小してくる見通し。



台湾 現状は2018年秋の台風被害の反動で増加している。今後については国際線座席数が減少しており伸び止まる見通し。

欧米豪 現状は大幅な増加が続いている。今後については座席数の伸びが鈍っているものの、陸路流入の旅行者が多く、欧米豪からの訪日旅行者全体は増加が続くとみられるため、増加が続く見通し。



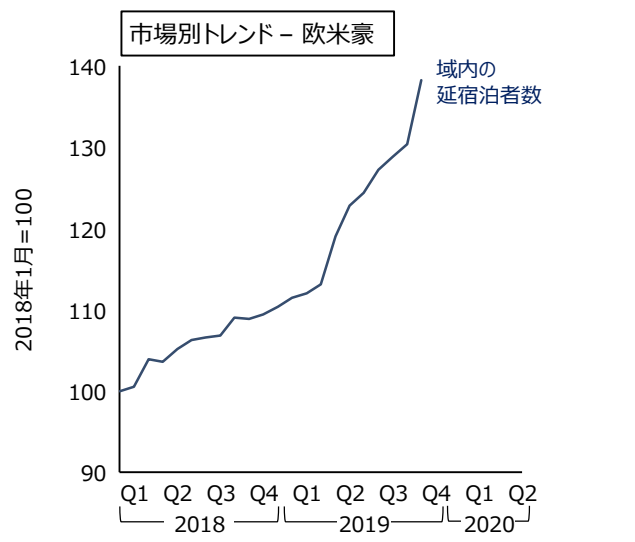
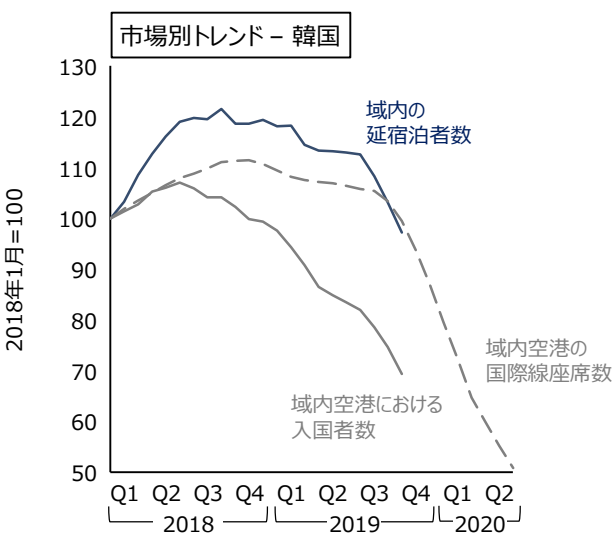
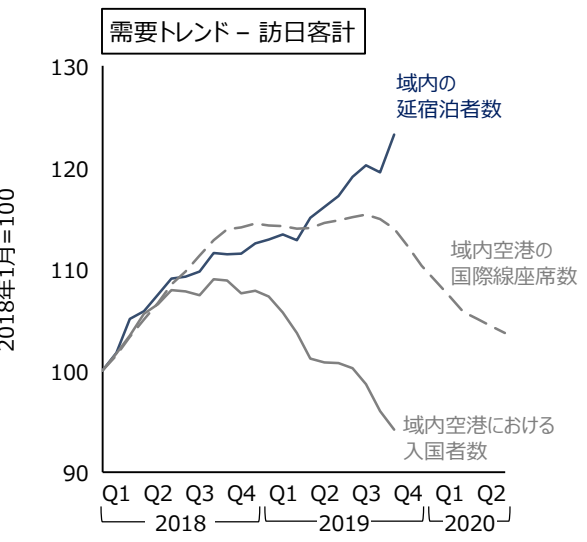
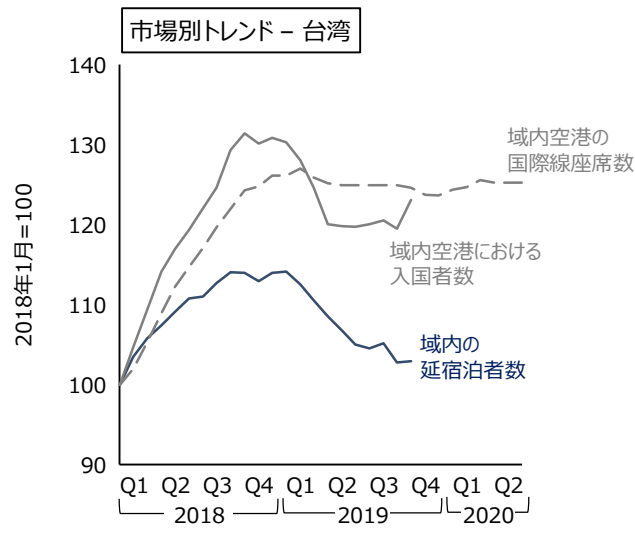
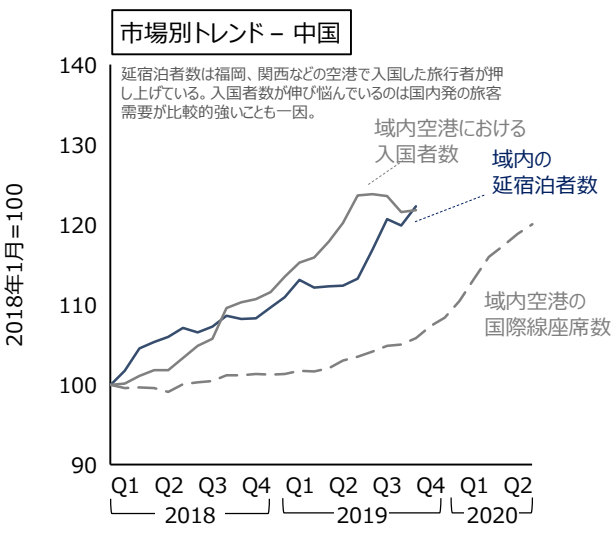
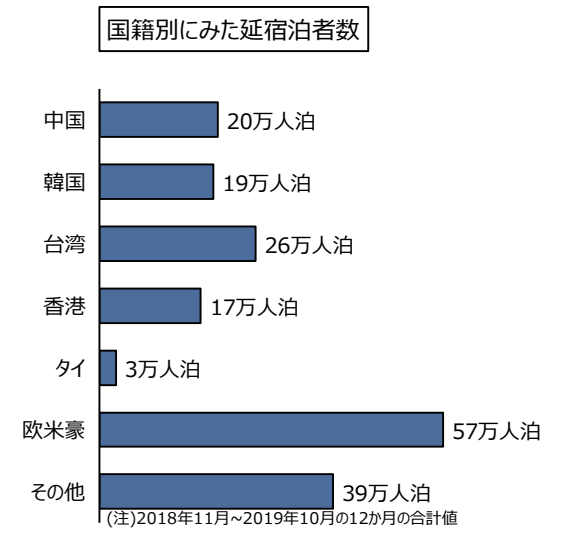
地域別市場動向 - 中国

現状は欧米豪や中国の伸びでトータルの需要も大幅な伸びとなっている。今後は中国が減少に転じ韓国の減少も続くためトータルの需要も伸びが鈍る見通し。

中国 現状は大幅な増加が続いているが今後は新型コロナウイルスの影響で減少に転じる見通し。
韓国 現状は大幅な減少が続いており今後も減少が続く見通し。

台湾 現状は減少となっているが、今後については座席数も下げ止まっており前年の反動も期待されるため、下げ止まる見通し。
欧米豪 現状は大幅な増加が続いている。

(注) 欧米豪については域内空港への直行便乗り入れがないため見通し判断をしていない。



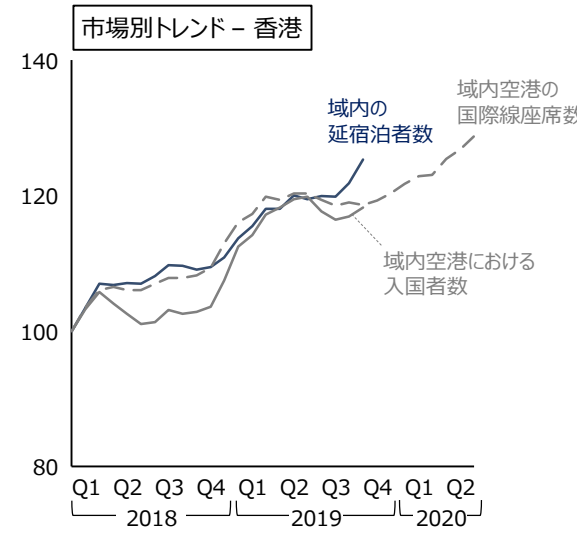
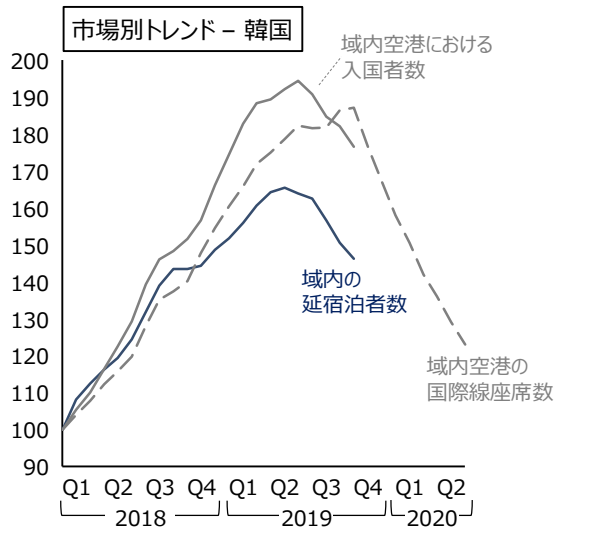
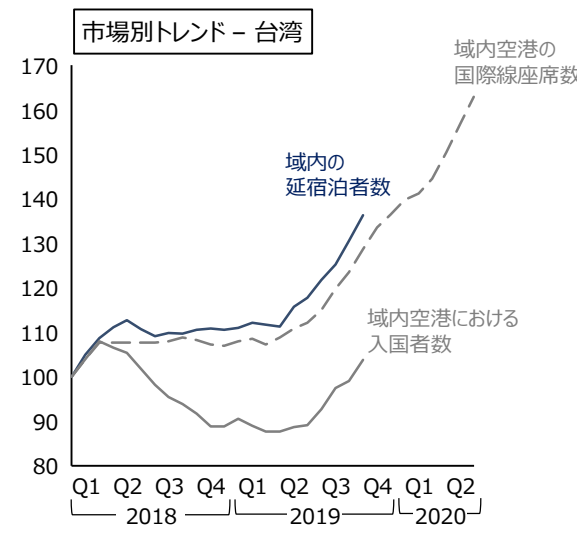
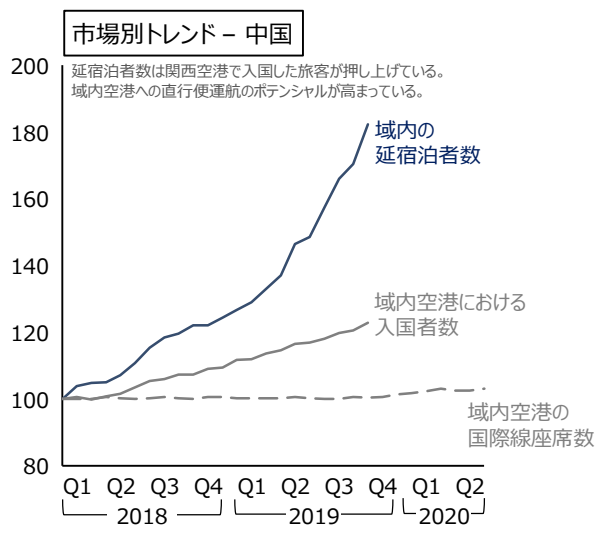
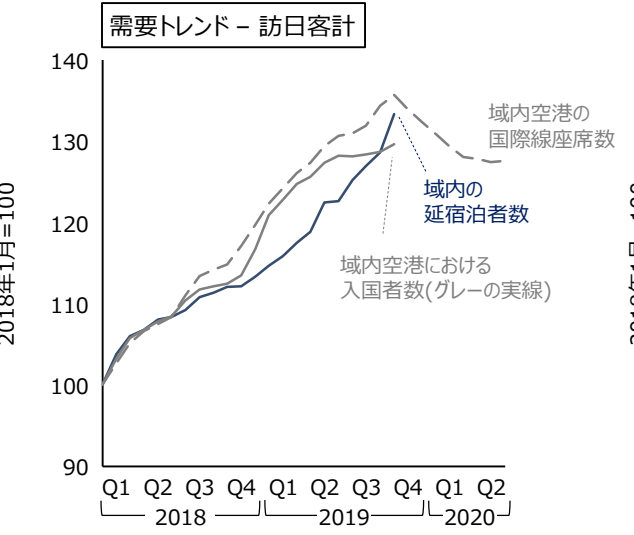
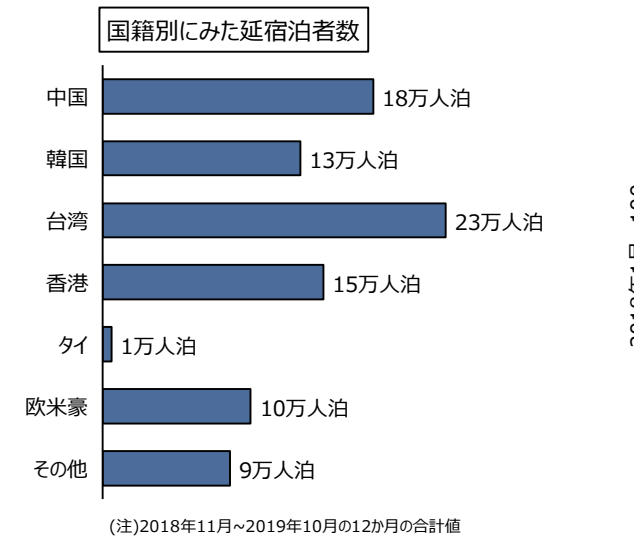
(注) 線グラフは12か月移動累計値を2018年1月を100とする指数で示したもので、データ出所：延宿泊者数は観光庁「宿泊旅行統計」、入国者数は法務省「出入国管理統計」、国際線座席数はOAG。

地域別市場動向 - 四国

現状は台湾、中国、香港の伸びでトータルの需要も大幅な伸びとなっている。今後は中国が減少に転じ韓国の減少も続くためトータルの需要も伸びが鈍る見通し。

中国 現状は大幅な増加が続いているが今後は新型コロナウイルスの影響で減少に転じる見通し。
 韓国 現状は大幅な減少が続いており今後も減少が続く見通し。

台湾 現状は大幅な増加が続いており今後も増加が続く見通し。
 香港 現状は大幅な増加が続いており今後も増加が続く見通し。



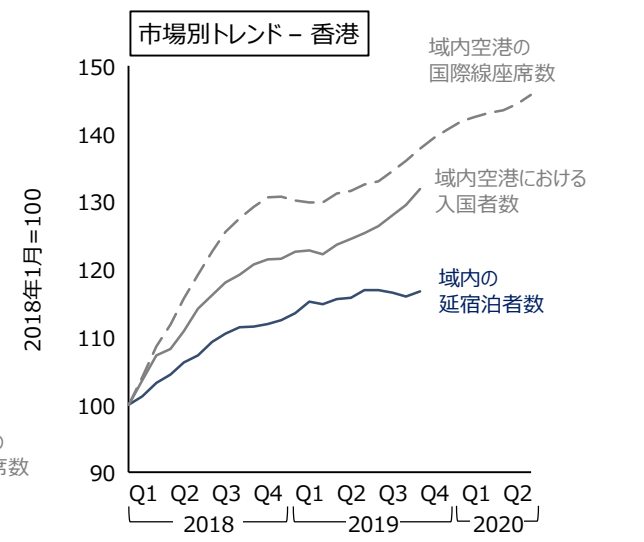
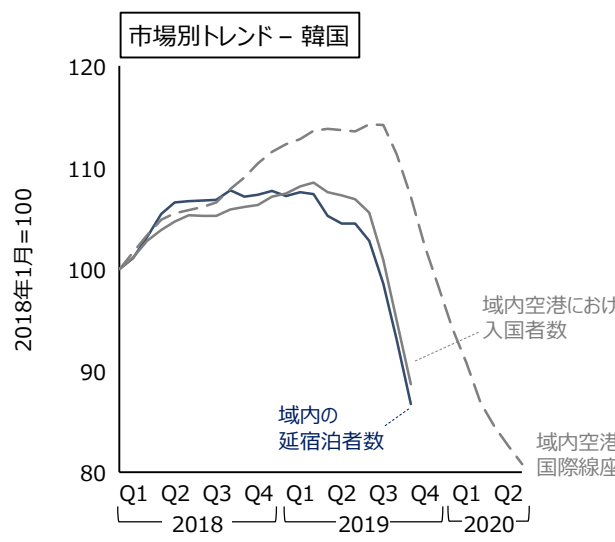
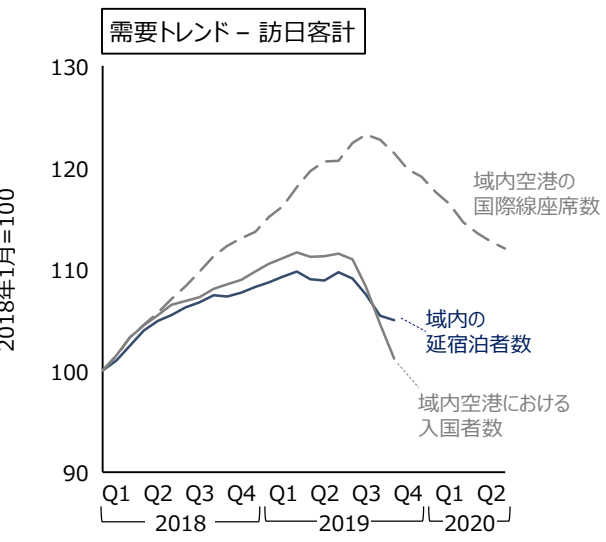
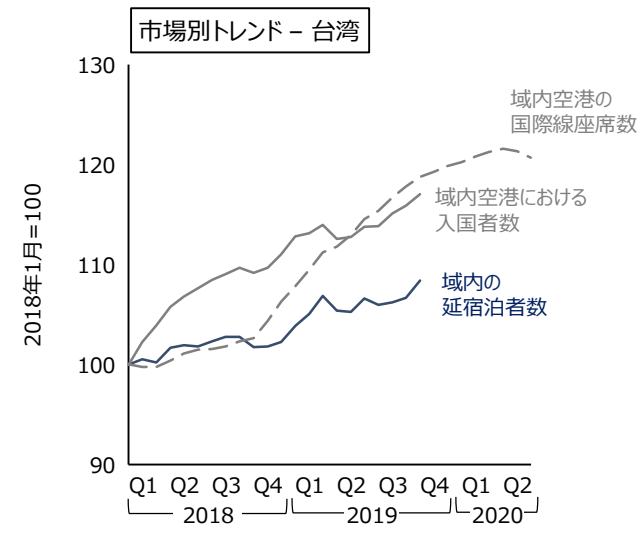
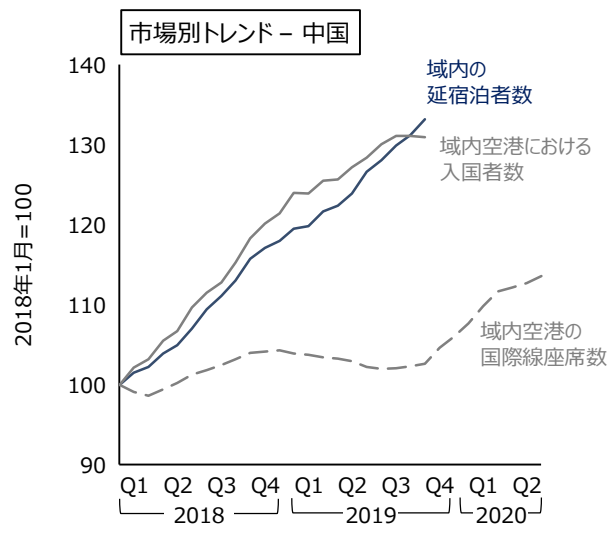
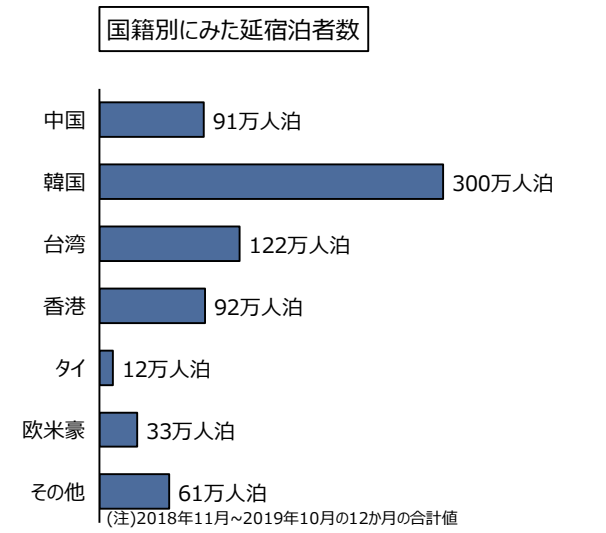
(注)線グラフは12か月移動累計値を2018年1月を100とする指数で示したもので、データ出所：延宿泊者数は観光庁「宿泊旅行統計」、入国者数は法務省「出入国管理統計」、国際線座席数はOAG。

地域別市場動向 - 九州

現状は韓国の急減でトータルの需要も大幅に減少している。
今後は中国が減少に転じ韓国の減少も続くためトータルの
需要も減少が続く見通し。

中国 現状は大幅な増加が続いているが今後は新型コロナウイルスの影響で減少に転じる見通し。
韓国 現状は大幅な減少が続いており今後も減少が続く見通し。

台湾 現状は増加が続いており今後も増加が続く見通し。
香港 現状は横這いだが今後については座席数が上向いており増加に転じる見通し。



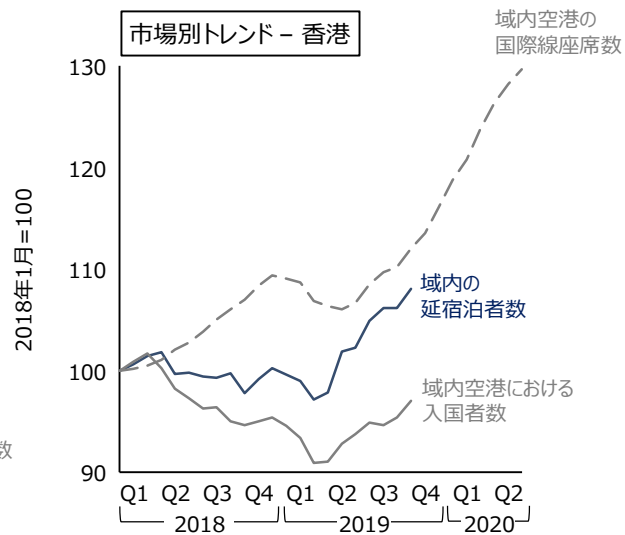
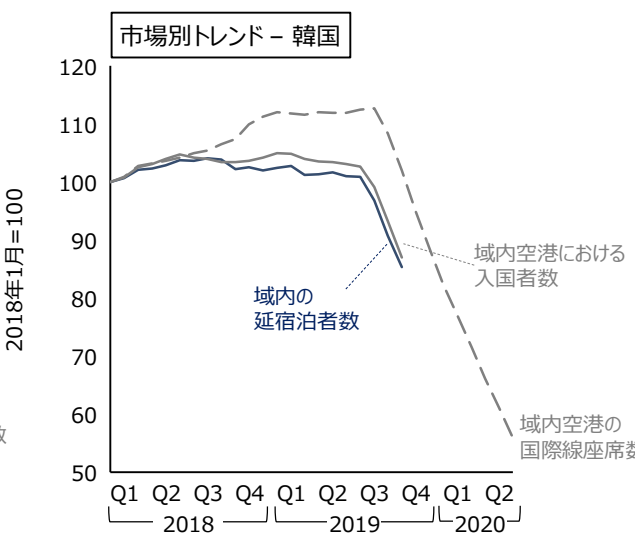
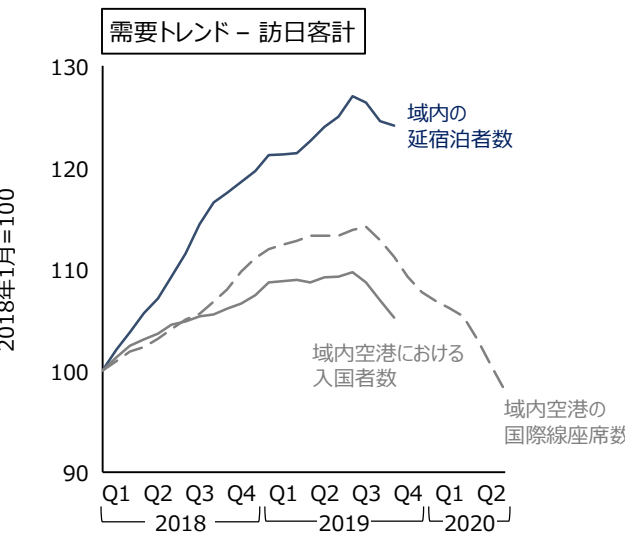
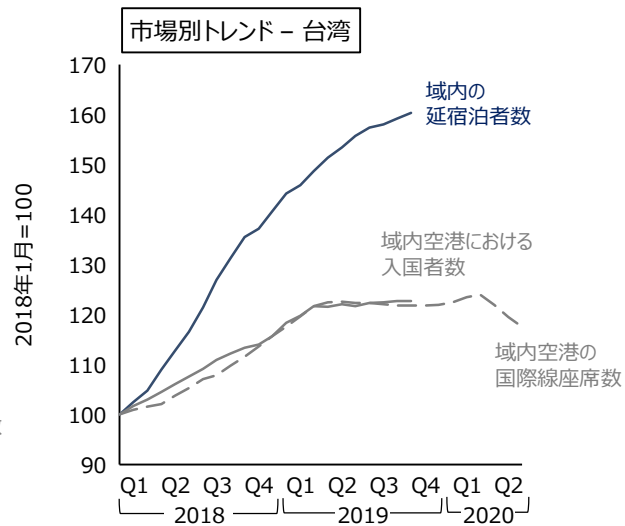
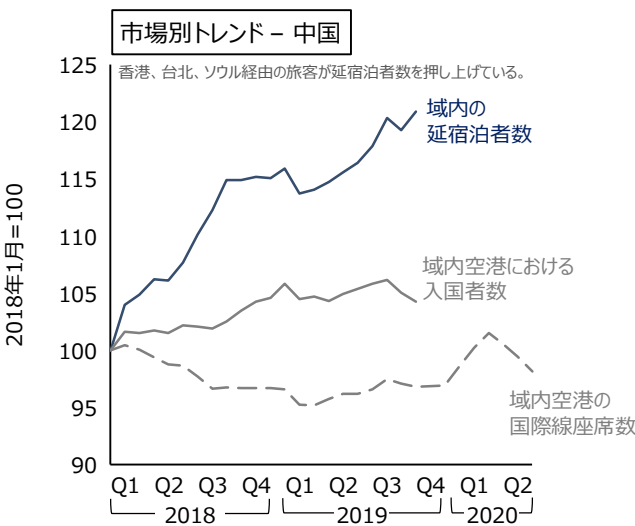
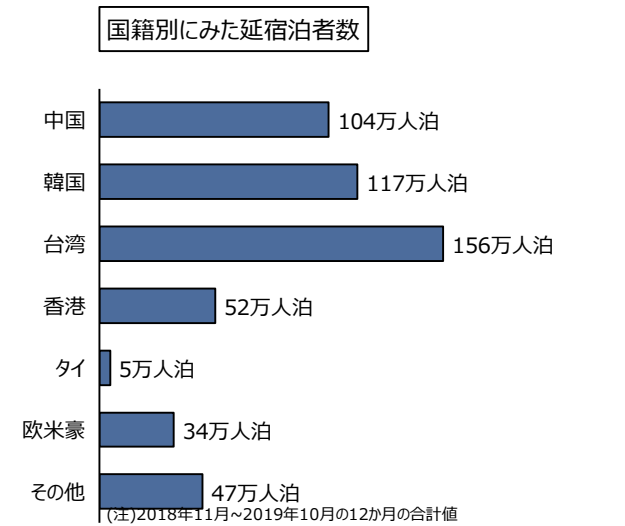
(注)線グラフは12か月移動累計値を2018年1月を100とする指数で示したものの。
データ出所：延宿泊者数は観光庁「宿泊旅行統計」、入国者数は法務省「出入国管理統計」、国際線座席数はOAG。

地域別市場動向 - 沖縄

現状は韓国の急減でトータルの需要も緩やかに減少。今後は中国が減少に転じ韓国の減少も続くためトータルの需要も減少が続く見通し。

中国 現状は大幅な増加が続いているが今後は新型コロナウイルスの影響で減少に転じる見通し。
韓国 現状は大幅な減少が続いており今後も減少が続く見通し。

台湾 現状は増加が続いているが今後については座席数が横這いとなっていることから伸び止まる見通し。
香港 現状は大幅な増加が続いており今後も増加が続く見通し。



(注)線グラフは12か月移動累計値を2018年1月を100とする指数で示したものの。
データ出所：延宿泊者数は観光庁「宿泊旅行統計」、入国者数は法務省「出入国管理統計」、国際線座席数はOAG。

4.2020年の訪日旅行者数予測

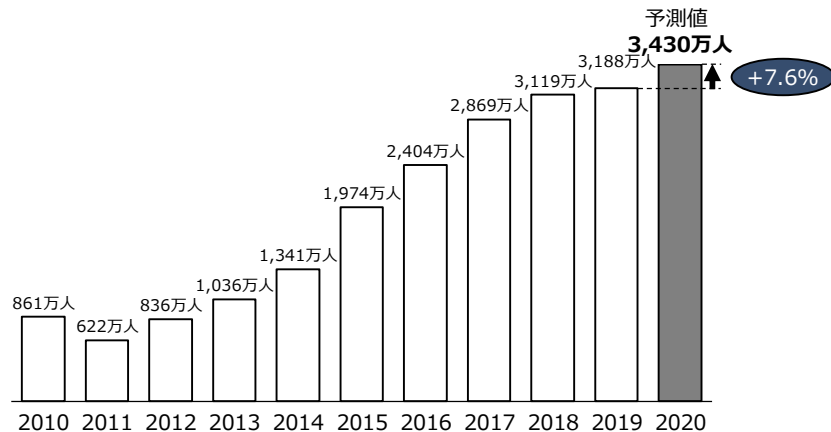
このセクションでは2020年の訪日旅行者数予測を主要市場別(中国、韓国、台湾、香港、欧米豪)に掲載しています。

2020年の訪日旅行者数予測

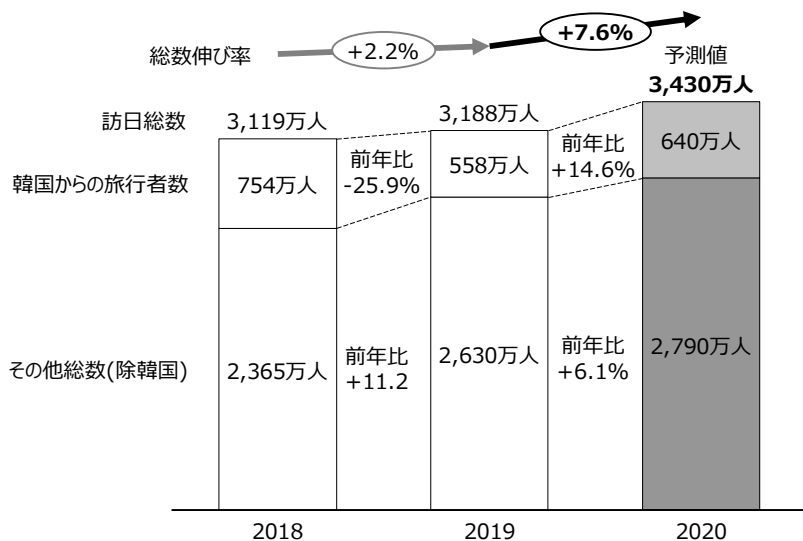
2020年の訪日旅行者数は3,430万人(前年比7.6%増)と予想
 韓国のリバウンドが期待される一方、五輪ではある程度マイナスの影響も

- 2019年は下期に韓国が激減したことで前年比2.2%増と低い伸び率にとどまったが、韓国を除く市場は前年比11.2%増と二桁台の成長を維持した。
- 2020年も羽田、成田の空港容量拡大で国際線座席数が増加、これが訪日需要をけん引するものと期待される。その一方で訪日旅行者数の7割強を占めるアジアからの旅行需要がピークとなる7～9月期に東京オリンピックが開催されるために、ある程度のマイナスは避けられないと予測。韓国を除く市場の伸び率を6.1%増と2019年に比べ低めに予想したのはこれが理由となっている。
- 日本のインバウンドのシーズンリティは欧米豪などアジア圏外からの旅行者のピークが4～6月期にあり、オリンピック開催時期をうまく外している。2012年にロンドンオリンピックが開催されたイギリスの場合はロングホールの需要が夏季に集中しており、これに比較すると東京オリンピックは影響が大きくなりにくい可能性がある。
- 以上の需要予測は2019年12月までの市場の状況に基づくものである。その一方で、2020年1月半ば以降、感染拡大が進んだ新型コロナウイルスは訪日需要に大きな影響を及ぼしつつあり、年間の旅行者数にもマイナスの影響を及ぼす可能性が高まっている。しかし現時点(2020年2月上旬)では新型コロナウイルスの年間の訪日需要に対する影響を定量的に検討することが困難である。本ページの訪日旅行者総数の予測には新型コロナウイルスの影響は織り込まれていない。

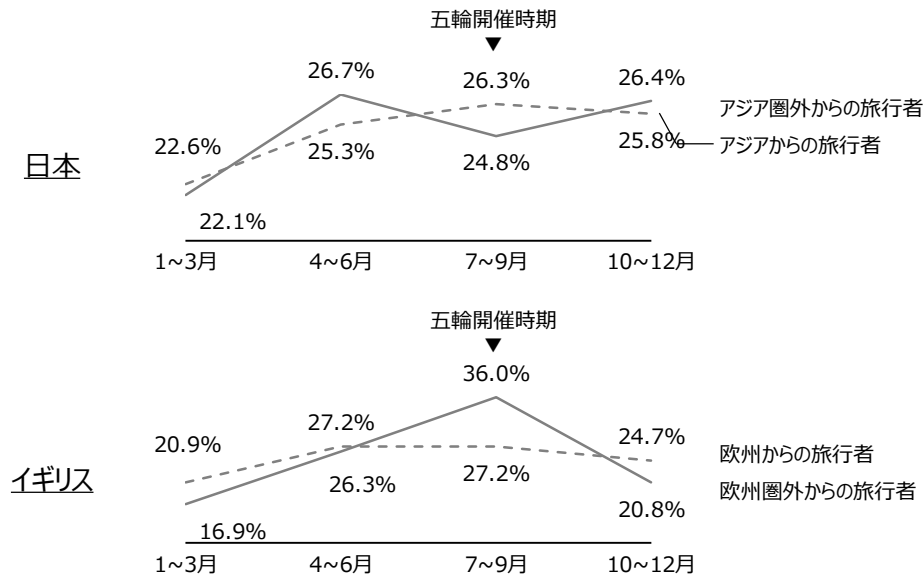
訪日旅行者数の推移



訪日旅行者数予測値の内訳



日本とイギリスのインバウンド旅行者数のシーズンリティ比較



(注)日本のシーズンリティは2013～2018の平均値、イギリスのシーズンリティは2009～2015(2012は除く)の平均値
 データ出所: JNTO、Visit Britain

東京オリンピックの訪日旅行者数に対する影響度

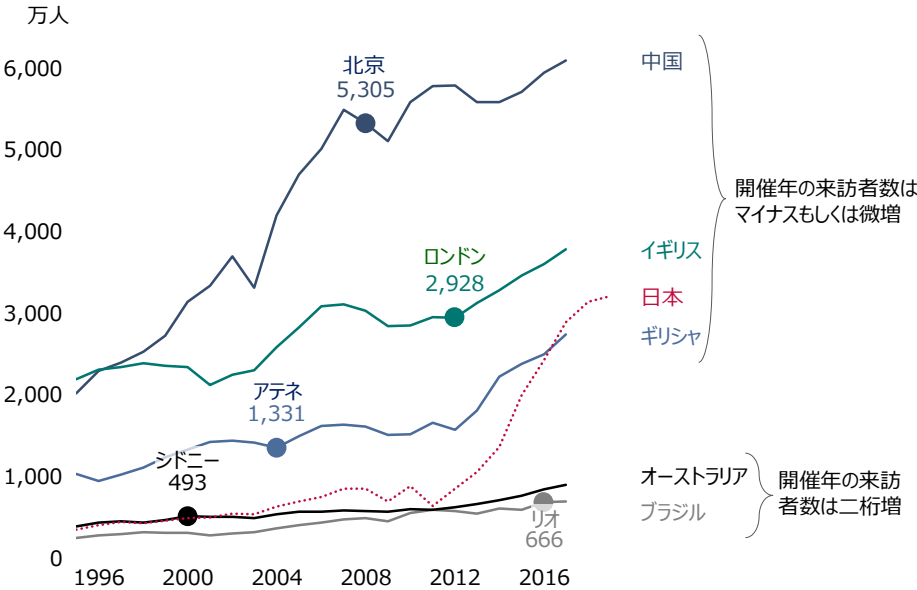
インバウンドが年間1000万人超の国ではオリンピック開催年の来訪客数はマイナス、もしくは微増にとどまる

- 下のグラフは2000年以降の夏のオリンピック開催国のインバウンド旅行者数の推移をUNWTOのデータに基づいて比較したものである。
- このうち、シドニーとリオデジャネイロでは開催年の旅行者数が二桁増となったが、アテネ、北京、ロンドンではマイナス、もしくは微増にとどまった。
- インバウンド旅行者数が一定規模以上となると、オリンピック観戦客・大会関係者の増加による来訪客の押し上げ効果よりも、オリンピックに直接関係ない一般の旅行者による混在回避などのマイナスの影響が上回るという構図があるのではないかと推測される。
- 日本のインバウンド旅行者数は年間3000万人を超えており、オリンピック開催年におけるギリシャやイギリスを上回る水準に達している。東京オリンピックに関しても一般客に対するマイナスの影響が観戦客等の増加による直接効果を上回る可能性が高いと推定される。

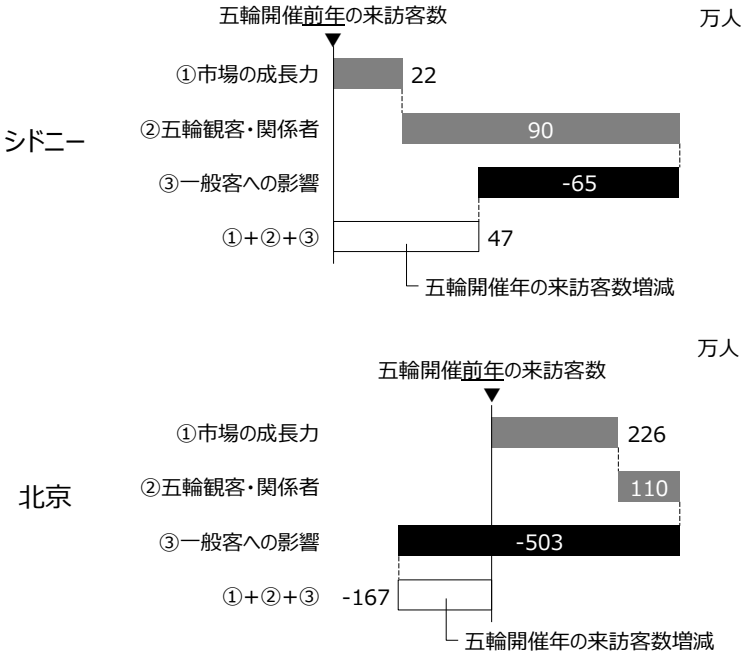
東京オリンピックのマイナスの影響は過去の大会に比べて小幅なものにとどまると予測

- 下のウォーターフォールチャートはオリンピックによる直接的なプラス効果と間接的なマイナスの影響の相互関係を図解したものである。
- オリンピック開催年の最終的な来訪客数増減にはベースとなる市場成長力(①)も関わってくるし、③のマイナスの影響についても、ホテルや航空座席の需給状況など、様々な要因が関係してくる。
- 東京オリンピックに関しては①の成長力の水準が相対的に高く(羽田、成田の空港容量拡大などの要素を評価)、韓国の反動増のような特殊要素も期待されるため、2020の年間来訪客数増減(①+②+③)がマイナスになることは考えにくい(新型コロナウイルスの影響は考慮していない)。また③の規模についても、ホテル客室数が大幅に増えているためレートの上昇幅が抑制され、シドニーなどと近い水準にとどまるのではないかと予想される。
- そもそもオリンピックのツーリズムに対する効果は開催年単年の旅行者数の増減で評価されるべきものではなく、開催翌年以降における中長期的な需要の底上げなど、オリンピックレガシーの観点で捉えられるべきものであろう。

夏のオリンピック開催国のインバウンド客数推移



インバウンドに対するオリンピックのプラス効果とマイナス効果



データ出所：予測数値はJTBC総合研究所、実績値はJNTO、各国統計局、PATAmPOWER

データ表

このセクションには本レポート掲載の図表すべての数値が掲載ページの順に収録されています。